る。

第六節　叙述的科學の重もなる種類

叙述的科學の六種類

(一)空間に關するもの

叙述的科學の重もなる種類は六つある。(第一)は、空間に關するもの、即ち空間的現象は果して何であるか、空間を實驗し測量する方法は如何、といふやうな問題を研究するのであるが、此等の問題を研究すると常識に取つては妙な結果になつて來る。蓋し空間は物と違つて之を捉へることも出來ねば觀察することも出來ず、常識家や又は批評的實在論者が考へるやうなものとは丸で違ふ。果して空間は物でないならば、果して何であるか、一般の人々が有する空間的經驗の性質意義は何ぞや、といふ問題が起り、斯かる問題が起ると直ちに叙述的科學の範圍を越えて解釋的科學の範圍に入るから、後者に此問題を讓らねばならぬ。

數學は規範科學の

多くの人は、數字を以て空間上及び數の上の關係を論ずる最も純粹な科學と見做すが、然かし仔細に之を見ると、數字を以て空間を叙述する科學とすることは正當ではなくして、寧ろ先天的觀念則ちいはゆる範疇を研究する一種の科學である、からして數字を叙述的科學の内に入れるのは不適當であつて、寧ろ規範的科學の内に入れねばならぬ。

内に入るべきものである

斯樣な次第であるから、空間を叙述する科學といふものは實際に於いて無い事になる。

(二)無生物界の現象に關するもの

(第二)は無生物界の現象に關する科學、例へば物理學、化學、地質學、天文學などで、簡單に之を總括していふと、物理的科學である。此等の科學は、第二十世紀の我々に取つて最も有り觸れたものであるから、別に證明する必要はない(百年この方此の種の科學が非常に盛んになり、其の種目が夥しくなつたので、多くの人々は此種の科學のみが科學であると考へて居るけれども、其は甚だ狹まい見解である)。

(三)生物界の現象に關するもの

(第三)は生物界の現象に關する科學、例へば植物學、動物學、動物心理學、生物學、解剖學、生理學などであるが、之を總括して生物科學とい

ふ場合もある（此種の科學は凡そ五十年この方盛んであるが、未だ數學を應用することが出來ないために、物理的科學のやうに精確になつて居ない）。

（四）人間界の現象に關するもの

（第四）は人間界の現象に關する科學である。時に之を總括して人類學（アンスロポロヂー）といふが、この人類學といふ術語を狹い意味で用ゐる事もあるから區別を立てねばならぬ。この狹い意味の人類學が關する問題は主もに身體の形態若くは性質であつて、他動物との相違點を研究し又は人間の種類に就いて研究する、通常人類學の上に人種學なるものがあつて、之が主もに人種の性質や習慣を研究し兼ねて古代文明の狀態を推究するのである。

之は狹義の人類學とは別である

私の表に於いては、此等の科學を人間學の最下に置いてある。

予の配列法

私は人間界の現象に關する科學を配列するに、先づ大體社會的の諸科學から始めて、其上に心理的美術的倫理的宗教的の諸科學を置いた。前にも言つたやうに、此等四種の科學はみな社會學の内に入れても差支なく又實際さうする學者もあるが、然かし此等四種のものは頗る重要なものであるから獨立の學科と見る方が便利である。

（五）時間に關するもの

（第五）はあらゆる現象を時間の立場から研究するのであるが、其は現在に關するものでなくして寧ろ過去に關するもの即ち過去に於ける事物の狀態若くは事物變化の經驗、いはゆる生成（ヒカミング）（若くは轉化）の問題に關するものである（以上の四種の科學は靜的のものであるが之は動的のものである）。この研究法を死物界に應用することに依つて星や太陽や地球などに關する進化論が起り、之を生物界に應用する事に由つて動物植物又は人體の進化に關する進化論が起り、之を人間に應用する事に由つて人間文明の發達に關する歴史學、殊に人間の社會的政治的經濟的美術的倫理的宗教的の歴史學が起る。勿論、此等の諸科學は之を研究する者の趣味と便宜とに據つて種々細かに分けることが出來るし、又此等の諸科學に就いて細かなことを述べやうとすれば隨分長い御話をせねばならぬが、然かし大體の性質はこの第五の科學に於いて現はされてある。

（六）時間そのもの

（第六）は時間そのものに關する科學であるが、之を叙述的に研究しやう

に關するもの

とすれば、空間の場合と同樣で直接に觀察も實驗も出來ないので非常な困難が現はれて來る。蓋し、時間といふ觀念は總ての經驗の中に含まれて居る。物質の活動に於いても思想の變化に於いても直ちに此觀念が附き添うて來る、此觀念を引離しては其活動も其變化も考へられないのみならず、時間そのものをも考へられないやうである。そこで時間は如何にして存在するか、如何にして時間の經驗を說明するかといふやうな問題が起るのは、空間の場合と同樣であるが、說明となつて來ると、叙述的科學の領域を脫して解釋的科學の範圍に入る。故に、純粹な意味の科學主義（エンチシズム）は、時間空間を叙述的科學以外に置くのである（序での話であるが、我々が時空に關しても、經驗は依然として有るが如く有る。故に我々が之を有りのまゝに觀察し實驗し叙述するに於いて別段差支へたことはない、それで科學主義（エンチシズム）者の謂ふ所の科學は說明によつて何等の變化も受けずして成立し得るのである）。

右の中、空間と時間とに關するものは嚴重な意味に於いて叙述的科學の內に入らない

右六種類の中の二つ即ち空間に關するものと時間に關するものとは、言はゞ無効になり又混雜に陷つたものである。之を他の方面からいふと、此二つが研究の對象とする所のものは實際に當つて見ると對象とはならないものである、從つて嚴重な意味に於いて叙述的科學の內に入らない。第二第三第四の叙述的科學は研究上別に困難に出逢ふこともなく、適當に研究すれば對象を明瞭にし內容を豐富に且つ精密にすることが出來る。近代の學問が長足の進歩をなしたといふのは、此三種の叙述的科學の進歩を意味するのである（但し此三種の內に在る個々の科學は、其數實に多くして茲に枚擧するの遑がない）。第五の科學は、前に言つたやうに過去の事實殊にその過程を研究するものであるが、其過程を直接に觀察することの出來るものは比較的に精確である。其精確な過程を本據として又昔しあつた同種類の過程を推知することが出來る。それで或る科學者はズット大昔しの事柄でも又ズット將來の事柄でも確實に知ることが出來ると主張する。或程度まで其は本當であつて、

科學に依て或程度まで過去を察し將

來を見ることが出來る

但し茲に記憶すべき三つの事がある

文明の進歩に對する近代科學の著大なる寄與貢献は、即ち過去を察し將來を見る知識であるに相違ない。將來を見る知識に據つて、正に取るべき道を辨へ、正に爲すべく又は爲し得らるべき事を悟つて、そこから創造的能力が發生して來るのである。但し茲に我々の記憶すべき三つの事がある。(一)過去に關する知識は確實なものと言つても、其は蓋然的なものであつて或假定に賴るのである、吾人は果して過去に於て働いた所の要因の總てを知ることが出來るかといへば、其は直接に觀察しないことだから斷定は六つかしい、又百年千年萬年の將來に於いて果して現在と同樣な原因が働くかといへば、其もさうだと斷定することは出來ない。(二)將來に對する豫言は時間空間に關する科學的知識に關係しない。(三)時間空間が科學として說明せられない如く、物質又は勢力も科學として究極的に說明せられないのであつて、唯その表面上の現象に就いて言ふことが出來るばかりである。然かし此等の事共に拘はらず、純粹の科學としては別に差支へたことはないのであつて、要するに叙述的科學は究極的根本的の問題を深く了解するの必要はないのである。

具體的科學と抽象的科學との區別を立てるは餘り利益にならぬ

(茲に諸君の御參考のために申添へて置きたい事は、諸科學を分類するに就いて或人は具體的科學と抽象的科學との區別を立てるが、私の見る所では、此區別は餘り知識分類上の利益にならぬといふ事である。何故かといふに、如何なる具體的科學でありても、多少の抽象的觀念を起し、又その觀念なば諸的の現象ばかりの研究を以て滿足せずして、多の具體的現象を簡約に代表するものとして用ゐるに外ならぬ。いはゆる法則とか原理とか式律とかいふものは、諸多の現象を一般化し抽象化したものである。最も具體的な科學と思はれる天文學や物理學や化學などに於いても、客觀の現象を觀察し判斷するものは我心であるから、主觀的の要素即ち抽象的の要素が必ず含んで居る。如何なる觀察でも判斷でも我と非我(即ち主觀的な心と客觀的な現象)との兩方の働きがなければ行はれる道理はないのだから、絕對的に具體的な科學はないのである。其樣な科學があると思うて居る人は、客觀の現象を認識する主觀の分子を忘れて只客觀の現象あるのみと考へるが、仔細に立入つて吟味して見れば、最早や幾分か抽象的觀念を運用して居るのである。況んや、その客觀現象の變化とか成長とか發達とかを總括して原則又は法式など云ふのは、顯然たる抽象的觀念であると謂はれねばならぬ。このやうに科學は、複雜多端な現象の代表的觀念として簡單な個利なる若干の律を立て、之を以て客觀の世界を了解し記憶し且つ支配することが出來る。科學は現象を說明するに、少しも五官に觸れない所のものが存在するといふ事を好く唱へる。例へば、一個の石を拾うて之を碎けば段々小さき塊になるが、化學者はその一つの小さな塊りは分子によつて成立ち、その分子は微分子(電子)に成立ち、その微分子は最小微分子にによつて成立つと說明するが、其等の分子は五官に觸れないものだから畢竟觀念上のもの即ち抽象的のものである。又例へば、物理學者は物質界の種々なる運動變化とか勢力の働きとか化學力といふ名稱を附して居るが、これも又抽象的の觀念たるを免れない。凡ての科學は具體的現象に由つて始まるものであ

るが、進歩するに從うて益々抽象的に赴くものである。故に、具體的科學と抽象的科學との區別を立てることは、我々に取つては餘り利益にならぬ。具體的であるか將た抽象的であるかは、その科學の進歩の程度によるのである）。

第七節　解釋的科學の重もなる種類

本章第五節の第二項に於いて解釋的科學の性質に就いて述べた事に聯關して、茲に第一言はねばならぬ事は、この解釋的科學が普通に廣い意味の哲學と稱せられて居る事である。之を二種に分け、（甲）或一定の現象即ち經驗の或部分を限つて解釋するもの（乙）現象即ち經驗の全體を解釋するもの、換言せば一つの宇宙觀に立つて總ての現象を全體として解釋するものとする。甲を部分的の解釋的科學と稱し、乙を普通に形而上學又は實體學と稱する。表に於いては、乙を解釋的科學中の一番上に置くのが宜いかと思はれるが、然かし宇宙の實體に關する見解は澤山であり各見解の出發點も其々異なるから、便宜上之を右の方に置き、甲を左の方に置いた譯である。

之を二種に分ける

（甲）部分的の解釋的科學

（甲）部分的の解釋的科學

大體に就いていへば、此種の解釋的科學は叙述的科學が示す現象を說明せむとするものであるが、之を分けて六つとする。

（一）空間の性質を解釋する科學

（第一）は空間の性質を解釋するもので、之を便宜上空間の哲學と言つてもよい。此科學は叙述的科學者の提供する難問題を說明せんとするが、之が解答に就いての話は後廻はしにするが宜いと思ふ。

（二）無生物界の現象を解釋する科學

（第二）は無生物界の現象にかゝる者であつて、物理學上、化學上、地質學上、又は天文學上抔の事實を合理的に說明せんとするのだから、之を自然哲學と稱する事もある。斯學は、或る觀念や想定（ポスチュレート）を土臺として無生物界の諸現象を說明し得た積りである。一例を擧ぐれば、物理學に於て物質界の諸現象を說明するに、二種の觀念を以てするやうなものである。

物質と勢力とを以て之を解釋する

その第一種は物體に關する觀念であつて、いはゆる分子とか原子とか電子とかいふ見えざるものゝ存在を想定し、且つ此等のものに其々一定の性質があると想定する、のみならず、更に微妙にして少しも測ることの出來ない「エーテル」といふ物の存在と其一定の性質とを想定して、物質界の諸現象を解釋せんとする。第二種は物質の運動に關する觀念であつて、種々の勢力例へば重力とか化合力とか電氣力とかいふものを想定すると共に、此等の諸勢力に一定の性質があう又活動の定律があることを想定する、斯かる觀念をば稱して運動因（エフィセント、コーズ）といふ（物理學者の說によれば、此等の勢力は物質の內か外かに働き、其結果として分子や原子が動いて來る、其動くのは後ろから推されて前に向つて進むやうな狀態である、而して其運動は必然的であり、其運動の程度は數學的に勢力の程度に比例するといふ）。

之は概念を基礎として臆說なたるものである

自然哲學者は、斯樣な少種類の物質と勢力とを以て物質界の有らゆる現象を說明し得ると考へ、又之に依て過去の事實を察知し將來の出來事を豫見し得ると思ふ。斯くて諸現象を說明するに成るだけ單純で簡單な概念を求め、此概念をば基礎として種々なる臆說を構成するのである。例へば、天文學者は無限の空間と時間とを想定し、其想定の上に物理學者が謂ふ所の分子原子電子及び諸勢力を借り加へて、以て物質世界の太初混沌の狀態より段々進化しつゝ終に今日の秩序整然たる世界になつたと說明し、而して斯樣な說明を以て自身の將に爲すべき本務を了へたと考へる。彼等が吹聽する天文學上將來の豫言はいかさまと思はしむるものがあるから、一般の人々は彼等の所說に隨分權利のあることを認めるのであるが、少數の人は其れに止まることを欲しないで、更に現象の奧に入り込んで、其現象の性質及起源を究めんとする。即ち所謂分子原子電子エーテルとは果して何であるか、何故に其等が一定の性質を有つて居るか、何故に其性質が永遠に不變であるか、所謂勢力とは果して如何なるものであるか、この勢力と所謂物質との關係は如何、この勢力が物質を推し動かす理由は如何、所謂運動とは丁度何であるか、總ての物が

運動するのか將たたゞ或部分のみが運動するのであるか、運動しない（從つて變化しない）者があるならば其は何者であるか、變化するものと變化しないものとの關係は如何、といふやうな問題に當ると、案外な困難に出逢ふのである。段々細かに研究を詰めて行くと、我々が物質世界の範圍に止まる間は、其困難を到底解くことが出來ないのであつて、詰り此等の問題は萬有の究極的性質に聯關する問題である、といふ事が段々明かになるであらう。そこで此等の難問題の解釋を試みんとする科學がなければならぬが、其は即ち物質界に關する形而上學である。

究極的問題は物質世界の範圍に於いて解釋されない

形而上學

斯樣な次第で、物質界の現象を解釋するに二種の學問がある、一つは嚴重な意味に於いて部分的であるが、他の一つは宇宙全體との關係聯絡を研究する。前者は實際的であり多大の實益を與ふるものであるが、唯少しばかり現象の裡に入つて種々の假定をなし其假定に據つて淺く現象を說明して其れに止まるものである。後者は現象の奥深く分け入るもの

物質界の現象を解釋する二種の學問

で非常に幽玄であるが、難解の點が多く、而かも之が何等の實益があるかと思はしむる位である。

（三）生物界の現象に關する科學

（第三）の部分的な解釋的科學は、生物界の現象に關するもので之を生物界の哲學と言つても宜しい。之も前と同じやうに、其現象を說明するに成るべく單純簡單な概念を求めるのであるが、物質界の場合とは違つて其概念を得ることが中々六つかしい。古代の人は「アニマ」といふ一つの眼に見えない神秘的のものが生物の內に在つて働いて居ると考へたが、中世紀の人は之を「ヴァイタ」即ち生命と稱し（このVitaは羅甸語のLifeである）、普通の物質的勢力とは違ふ一種特別な勢力であると見做して、之を以て生物界に於ける總ての現象を說明せんとした、斯樣な說明の仕方を普通に活力論（ヴァイタリズム）といふ。第十九世紀間に於いて物理學及び化學が盛んになつた爲に、所謂生命を解釋するに物理的若くば化學的の勢力を以てすることが流行し、昔の人が生命といふ一種特別な勢力があるやうに考へたのは畢竟物理的科學の

活力論（ヴァイタリズム）

物理的活力論（理化學的生命説）

新活力論

知識が足りなかつた爲めであると斷定した、而してこの物理的生命説を以て物理界と生物界との經界線を取除いた積りであつたが（此説を英語でPhysco-chemical theory of lifeといふ）、近來少數の有力な學者が此説の甚だ足らぬことを指摘したので、生命論が復興した。然かし舊式の生命論とは違ふから之を稱して新活力論（ヴァイタリズム）といふ。此論に二種類がある、甲は舊式に似寄つたもので、生命そのものは神秘的であつて其實質に就いては何とも説明が出來ないと論ずるが、乙は生命が心理性（サイキック、ナーチュア）に幾分か似て居る所から心理性を以て生命の説明を試むるものだから、之をサイキズム（Psychism）即ち心理的活力論と言つたら宜しからうと思ふ、兩方とも、生命に於いて理化學的要因が隨分働いて居ることを認めるが唯それだけでは足らぬと主張する。舊活力論即ち物理的活力論と新活力論との間の重もなる論點は、生物に於いて目的因が働いて居るや否やに在る。前者は運動因のみを認め唯それのみを以て生物界の現象を説明し得ると主張するが、後者は運動因と共に目

その二種類

舊新兩論の差異點

的因を認め、目的因なくして生物界の現象を滿足に説明することは出來ないと主張する、例へば、生物の大多數は卵子によつて代々繼續するのであつて、此卵子が發育し成長して境遇に適當な器官又は性質を具するに至るのであるが、此卵子が母の胎内に在つて未だ少しも光と關係しない先きから、光を利用して物を見分けるやうな眼がチャンと出來てくる。斯樣な目的的發生若くは運動を如何に説明すべきかといふのが、兩論間の討論の主題である。

古代希臘人の「ハイレー」といふ思想

茲に注意すべき二三の點があるから、序でに話して置かう。(一)昔の希臘人は、ハレイ（Hyle）といふ言葉に依て表はさるゝ所の、物質と生物との兩方を混合した觀念を有つて居たのであるが、之は死物と生物との經界線に緣のある觀念である。(二)物理界の現象の解釋の場合と同じく、生物界の現象の精確なる解釋がなくとも又其解釋が如何に相違して居つても、現象そのものは有るが如く有り而してその有りのまゝを觀察し分類することが出來る。鷄の卵は必ず鷄になる、その成長發育の事實や順序は説明法の如何に何も關係しないのである。(三)生物學者が生物の現象を説明するに用ゐる所の觀念は色々であり、そして大抵は其觀念を以て略ぼ滿足して居るが、少數の學者はそれで滿足せずして形而上の究極的意義を求める。或は運動因といひ或は目的因

現象の觀察又は分類は解釋の如何に關係しない

或學者は生物上の觀念の究

極的意義を求める

といひ或は化合作用といひ或は生命力といふ其名はどうでもよいが、此等の觀念の究極の意義は何であるかと尋れる。

而して又總ての事物の存在及び運動は時間と離る可らざる關係があるが。過去と將來とは現在に存在しないものと見えるのに、其がどうして現在に於いて働きつゝ現在を支配し變化さすのであるか、之を正當に解するには、過去現在及び將來と宇宙全體との關係を考へなければならぬ。切言せば、宇宙の究極者との關係上から考へなければ過去と現在と將來との相關問題を滿足に解する事が出來ない。生物界の現象を滿足に說明せんとすれば、たゞ生物學の範圍から取る所の觀念のみでは不可能であつて、生物學以外即ち形而上學の領域に入り込まなければならぬといふ。

過去現在未來の相關問題は究極實在者との關係上から考へなければならぬといふ

(四)人間界の現象に關する科學

(イ)社會的現象を解釋するもの

(第四)は人間界の現象に關するものであるが、其れに種々な區別がある。(イ)第一種のものは社會的現象を解釋するもので、其內容によつて色々の社會的科學に分かれる。前の叙述的社會學の所で言つたやうに、社會學が關はる現象は實は多樣であつて、社會の組織や制度や習慣や活動や言語や、其他人種の興亡、國家の盛衰など、數ふるに遑あらぬ(或る社會的科學は、特別に發達して一個獨立の地位を占めて居る、例へば、國家哲學とか法律哲學とか教育哲學とか稱するものは其である)。これら無數の現象を說明する爲に單純にして簡單な概念を求めるのであるが、先づ普通に人性といふ概念を起し、この人性を區別して知的情的意的道德的又は社交的などとし、人間には此等種々の性質があるから其に應じて種々の現象が起るのであると說明する(この說明が實は徹底しない皮相的のもので、あるといふ事は私の物かに感ずる所である)。勿論、人性を助長し又は阻碍する所の客觀的境遇があるが、其境遇には物理的生物的人間的の區別がある。(ロ)第二種のものは人間の心理的現象を解釋するものである。これにも種々の部分があつて或一定の現象を區分して論究するけれども、又全體を解釋する心理學もある。前の社會的現象の說明と同樣に、或は知的或は情的或は意的などと人性を種別し、斯く々々の人性があるから斯く々々の心理的現象が起つて居る譯であると言つて說

(ロ)人間の心理的現象を解釋するもの

明した積りである。若し今迄に見なかつた新現象があると、其に應ずる所の性質が人間にあると斷定して說明を遂げたとする。例へば、凡ての人間には言語といふ心理的現象があると、其を說明するには人間に言語の性質があり能力があるからだといひ、美を好み美術を產む現象があると、其は人間に美的性能があるからだといつて大抵滿足する。

（ハ）美的（ニ）道德的（ホ）宗敎的の現象に關するもの

次に（ハ）（ニ）（ホ）の種類に就いて一と纏めにいふと、美的現象の解釋に關する美の哲學、道德的現象の解釋に關する倫理的哲學、宗敎的現象の解釋に關する宗敎哲學がある。此等の現象は人生に於ける肝心な要素であつて、是に依て生活は豐富になり且つ貴重になると考へられる。此等の三科學は古代から獨立に存在し、少くとも最早數百年間繼續して來たものであるが、心理學は今日の意味に於いて近頃起つたものである。この三科學に於いても性でふ觀念をよく用ゐるが、其性の中で非常に重要視せらるゝ一つは目的を立てる性である。一體人間の意識的生活はみな目

この三科學に於ては目的を立てる人性を重要視する

的であつて、將來に向つて種々の思考を廻らし計畫を立て活動をするものである。宗敎であれ道德であれ美術であれ政治であれ、又は觀察といひ思想といひ說明といふ、是れ皆人間の要求に滿足を與へんとする目的に由るものに外ならぬ。故に目的因（ファイナル・コーズ）は人間界の諸現象を說明するに非常に重要なものであつて、之がなくては決して人間界の解釋的科學は成立たぬ。

目的因の必要

併ながら、これだけを以て滿足しないで種々六つかしい問題を提出する人々もある。二三の例を擧ぐれば、人間の心と身體との關係は如何、心と腦髓との關係は如何（心はどうして腦髓にのみ直接の關係があつて外の所に關係がないのであらうか）、心の統一を如何に解すべきか（心には種々なる性があり樣々なる作用があるやうに思はれるが、此等を統一するものは何であるか。心は啻に記憶せる過去と經驗しつゝある現在と豫期せる將來とを統一するのみならず、心自身が統一であるといふ事を自識する。我は則ち我である。我身の上に如何に變化が多くあつても昨年の我と今年の我とは同一物であると自覺する。如何にしてこの變化と同一とを解釋すべきか。）、記憶とは如何なるものであるか、過去は外界に於いて既に無くなつたのであるが心に於いては引續いて存在

提出せらるゝ種々の問題

人間界を充分に解釋するには全宇宙に關する觀念に關聯せねばならぬ

するのであるか、又我々は未だ起らない將來のことを今考へ得るが或意味に於いて將來は我心に存在するか、而かもどうして斯かる事が有り得るか、果して人間が前にも述べたやうに目的的のものであるならば、何かの意味に於いて將來は現在の內に存して居ると謂はねばならぬではないか、左らば過去と將來とは現在を支配し得る力があると謂はねばならぬではないか。と斯樣な事共を考へると、人間界の現象はたゞ部分的の解釋的科學のみでは充分に出來ないのであつて、之はたゞ準備的のもの實は表面的のものたるに過ぎない。故に人間界の現象を充分に解釋しやうと欲へば、どうしても全宇宙と關聯した全體的の思考に依らねばならぬ。思考すればするほど益々深く感ずる事は、凡ての部分的科學は彼方の科學を指示する、而して其科學の助けを借らなければ完きを得ないといふ事である。部分的の解釋的科學が現象を說明するに種々の抽象的觀念を立て名前を付けるのは、或程度まで頗る便宜であるけれども實際說明にはならない。諸現象を一束に纏め或は其に就いて語り或は其に就いて考へしむる爲には都合が好いが說明にはなつて居ない。進化論者が人間の性を說明するに人間が動物から段々進化して來たことを基とするのは事實上間違つては居ないだらうが、人間の性と人間の祖先たる動物性との關係は如何なるものであるか、といふ問題が明白でない。例へば人間に在る所の道德義務の念が單細胞動物にもあらうが、或る進化論者が人間の心を解釋するに、幾萬年間劣等の狀態に居る動物を基とするのは其當を得ないではないか、其は無から有を生ずるといふのと同じ論法ではあるまいか。

(五)時間上より諸現象の過程を研究する科學

(第五)は、時間に基いて凡ての現象の過程(プロセッス)(進行又は成行)を研究するものである。叙述的諸科學の證明する如く、凡ての物は常に活動しつゝ斷えず變化しつゝある、其現象の說明を試みるのが第五の解釋的科學の本領である。之を物理的現象に關する說明と生物的現象に關する說明と人間界の現象

に關する說明との三種に分ち、其々特別の問題を研究するが、三者を通じて起源の問題はその第一着であつて、次は經過の問題、次は完成の問題である。

(イ)無生物界に關するもの

(イ)先づ物理的現象即ち無生物界の現象の過程に關する解釋的科學からいふと、之は物質世界全體の起源繼續及び經過を說明するものであつて、之に由て種々の宇宙開闢論が起り來る。古代人の開闢神話は即ち之が一種の說明法であり、近代の最も進化した宇宙進化論又は星の進化說又は地球の進化說なども一種の說明法である。大體に就いていへば、之を唯物的即ち無神論的と心靈的即ち有神論的との二種類に分ける事が出來る、兩方とも叙述的物理學が示す事實を承認するが、其事實の基礎に就いて、前者は分子微分子又は勢力の外に何物も認めず運動因の外に何等の原因を認めないが、後者は唯これに止らず更に進んで究極的實在を認め、曾に運動因のみならず目的因をも認めんとする。前者は宇宙進化の全體は

その二種類

數量の一定した微分子の何億萬年間かの運動によつて說明し得られると考へ（曾に微分子の數量のみならず其種類も、其性質もチャンと極つて居ると考へる）、其より奥に入つて考へる必要もなく又考へても無益であるといふが、近來之に就いて新しい困難が起つた、其は少しも變化しないと思うて居つた微分子が斷えず放散しつゝ從つて變化しつゝあることを發見した事である。此事實に附隨して種々の問題が起る、例へば、如何なる譯で微分子が放散するのであらうか、其が放散しつゝあるとすれば微分子は何時か起つたものであらうが其は如何なる勢力で起つたのであらうか、如何にして其々の微分子の性質が極つたのであらうか、所謂電子（エレクトロン）（即ち最小微分子）とは何であるか、其が「エーテル」に由て出來たとすれば、少しも目方がなく全く透徹貫通自在な「エーテル」が、如何にして電子となり原子（微分子）となり分子となり個體となり非常に目方のあるものとなつて透通の出來ない性質を具するに至つたのであるか、と斯樣な難問題に衝き當ると、解釋的物理科學は根本的に物理界を解釋して

唯物的見解に關する難點

解釋的物理科學は

それ自身のみでは物理界を充分に解釋することが出來ない

居るのではなく、寧ろ物理界に就いて多くの抽象的思辨を縱まゝにして居ることが分り、その思辨をよく吟味すると又多くの困難があることが分る（「エーテル」とか電子とかいふのも、實驗的に證明が出來ないので、畢竟抽象的な思辨である）。それで、物理界を本當に解釋しやうとすると物理界以外の解釋法を用ゐねばならぬのであつて、物理科學は自己の說明を自己以外のものに委ねるやうになる。この解釋的物理科學の更に其奧に入り込む所の有神的進化說は、科學でないといふ者があるが、或意味に於いてはさうである。

（ロ）生物界に關するもの

その二種類

（ロ）次は生物的現象の過程（進行又は成行）に關する解釋的科學であるが、こゝにも又前と同樣な難問題が起る。生命を有する動植物は如何にして起つたか、一たび起つた動植物が如何にして又如何なる譯で漸次その形體を變じて今日の如くになつて居るか、といふ事は難問の例であるが、之に就いて自然的即ち無神論的解釋と超自然的即ち有神論的解釋との二つがある。前者はいはゆる生物的進化說に據りたゝ運動因のみを以て之を解釋せんとするが（生物の起源又は生物が器械的原因によつて變化し、つゝ終に人間に迄進化したことを解釋せんとする）、二十年この方、斯かる解釋法に於いて益々容易ならぬ難點を認める學者が多くなつて居る。彼等は前の第三項の所で述べたやうな批評的考案に據り、生物を起した所の勢力はたゞ抽象的の名辭のみでは本當に生物の說明にはならない（物を代表する名辭と物それ自身とは異なる）、或は物理的境遇が生物又は生物の器官に及ぼす影響を示し或は生存競爭の結果を擧げるのみでは、決して動植物進化の積極的說明にはならない、自然淘汰とか優勝劣敗とかいふ物理的の原因は、劣等生物を衰滅さす働きをするけれども新しい性質や活動を喚起するものではない、働きに由て幾らか在來の生物の分子（若くは要素）に變動を與へるといふのみでは新しいものを造り出す說明とするに足りないのである。それで詰りは超自然的の解釋を俟たなければならぬのである（勿論、之は普通の意味の科學的說明ではない、即ち現象世界の中に既に存在して居る所の原因のみに據つて說明するものではなくして、自然界以外のものを持込んで說明する所のものである）。

無神論的解釋の困難

（ハ）人間界に關するもの

（ハ）人間界の現象に關する解釋になると困難は益々多く且つ深くなつて

諸問題

來る。先づ人體進化の問題であるが、動物の進化を自然的即ち物理的に說明し得たと許しても其ればかりで人體を滿足に說明し得たのではない、人體の大部分はその祖先たる猿猴類から寧ろ退化したと謂はねばならぬが、腦髓と神經とが進化したのは何故であるか、之を解せんため動物を說明するに要する原因勢力の外に別の原因勢力を持出すならば、其は果して何であるか、果して其は何處から生するのであるか。次に人間あつて以來の歷史に關する多くの問題がある（例へば、甲の人種が興隆して乙の人種が衰亡する理由は何であるか、人類界に在る多くの制度習慣思想信念の中に盛衰の別ある所以は如何といふやうな問題がある）、此等歷史上の諸問題を解釋しやうとすると、文明を產出した諸原因を識別し妥當に之を定義する必要がある。そこで歷史的の解釋的心理學は、或は人間の知性を研究し、或は知識の起る順序を研究し、或は某の人種が美術に長じ某の人種が哲學に長じ某の人種が宗教的に長ずる理由を研究し、或は美術や哲學や宗教などの觀念若くは形式が國により時代によつて異なる所以を研究し、其他種

人間の性に據つて解釋するのは不充分である

種雜多の問題を研究する。普通のいはゆる科學的說明は、前にも言つたやうに人間に具はる性に據つて解釋を試みる。新規の思想や藝術や又は活動などが起ると、之を喚起した非凡の人物を擧げて、其人物に具はる天性を原因として說明し得たやうに思うて居る。勿論便宜上さういふ說明法を用ゐるのは敢て差支ないが、其が徹底しない不滿足な說明であるといふことに氣が付かないならば甚だ不都合である。肝腎な點はその性その天才を生起した根源であつて、此所に眞乎解釋の鍵が存するのであると知らねばならぬ。

（六）時間その物に關するもの

（第六）の部分的な解釋的科學は、時間そのものに關するものであつて之を時間の哲學と稱することも出來る。（但し此處で空間に關する第一種のものに就いて同時に述べる事は便利と思ふから左樣に御承知を願ひたい）。右の第二第三第四第五の諸項は、空間上の具體的事物と時間上の具體的徑路とに關する問題であるが、此の第六項に於いては具體的の事物を取除きたゝ時間空間その物のみの解釋に關するのである。既に

今日の最も進歩した見解

前に述べた通り、叙述的科學に於ては時間空間に就いて何等の觀察も叙述も出來ない、之は普通の意味の現象ではないから、現象を說明する所の方法では說明が出來ない。そこで時空に關する形而上學が遠い昔からあるのであるが、今日の最も進歩した見解によれば、時空は事物より過程より心より離れて獨立に存在するものではない、之は畢竟人格（人又は神の人格）の活動の一種の形式である。故に萬有が時空の內に存在するといふよりも寧ろ時空も萬有も悉く人格の內に存在するといふ方が妥當であつて、斯く考へてこそ始めて時空の何物たるを合理的に了解することが出來るのである。之は常識者又は思考の淺い人に取つては合點の行き兼ぬる見解であるが結局こゝに到達するの外はないと。

* * * * * *

部分的の研究は全體的の研究にまで

以上大略述べたやうな部分的な解釋的科學の研究の顯著なる結果は、一個獨立の地位を有すと思うて居る科學が、現象を解釋するに其ベストを盡しても尙ほ殘る所の難點は多く、而かも深い所まで解釋の手を延ばす事が出來ないからして、本當の解釋は部分的科學の領域外に求めねばならぬといふ一事である。即ち其手を宇宙全體の性質に迄延ばして、宇宙觀の大立脚地から部分に及ぼさねばならぬといふ始末になる譯である。

手を延ばさねばならぬ

(乙) 全體的の解釋的科學

この科學の性質

之を一般的哲學といひ又は形而上學といひ又は實體學といふ。其名稱は人によつて異なるが要するに宇宙を一つの全體としてその根本的實體は如何なるものであるかを研究するのである。叙述的科學が示す凡ての現象のみならず、其內に働いて居る力即ち所謂第二原因をも說明するに足る所の宇宙觀を立てんとする科學である。一方に於いては歸納法に依り、叙述的科學及び解釋的科學の結果を總合して一つの究極的原因觀を得んとし、他の一方に於いては演繹法に依り、究極的原因觀に基いて、

凡ての第二原因と其現象とを解釋せむとする。斯樣に經驗の一部に關せずして全體に關するものであるから、之を部分的の科學と同列に置くべきではなくして其上に置くべきである、私の表に於いて之を別に違つた欄内に入れて居るのは之が爲である。

人間は形而上學的の性行を有す

一體人間は形而上學的の性行を有するものである。野蠻未開の古代から一般の人は何かの形而上學的說明を求め、其說明によつて始めて事物が本當に解るやうに考へた。其說明が如何に素朴であり幼稚であつても難點を見出す迄は其で滿足し、一たび難點を見出せば何か變つた他の形而上學的說明を探求する。歷史を調べて見ると、合理的の形而上學的說明の起るより遙か以前から宗敎的の形而上學的說明があつた。今日に至るまで多くの人々は昔しながらの宗敎的形式で滿足して居るが、高等敎育を受けた人は其で滿足しないで合理的の形而上學的說明を用ゐるのである。

形而上學的宇宙觀をABの二種類に分つ

それでこの形而上學的宇宙觀は(A)主もに普通の合理的經驗を土臺とし て宗敎的經驗の僅かな部分を取り又は全部を取らないものと(B)主もに宗敎的經驗を土臺として普通の合理的經驗を第二に取り用ゐるものとの二種類に分ける事が出來る（此の二つの中地位の上下なく附けるならば何れも上に置くべきかと云ふ問題が起つて來るが、私が表の全體を通じて採用して居る科學分類上の原則が正當であるとすると云ふ見解が誤らなければ、宗敎的經驗に基く宇宙觀は寧ろ地位の高いものと謂つて差支あるまい）。

尙ほこの科學を三種類に分けることが出來る

尙ほ形而上學的宇宙觀は物質界から得た觀念に基くものと人間界から得た觀念に基くものとの三種類に分けることが出來る。人間が最初に起した形而上學的宇宙觀は宗敎的であつたから則ち第三種に屬するものであるが、合理的の形而上學的宇宙觀は第一に生物界から根本觀念を得、それから進んで或は物質界或は人間界から根本觀念を得るのである。以下(A)(B)の兩種類に分けて少しく述べやうと思ふ。

合理的の形而上的宇宙觀

(A) 重もに普通の合理的經驗に基く形而上學的宇宙觀の種類

(A)の宇宙觀の種類

私の表に就いて諸君に御注意を願ひたい事は、此表は何れの部分でも予の表の配列順序みな下から始まつて段々上へ進んで行く順序であつて、其順序は歴史的ではなくして論理的であるといふ事である。

(1)原子的宇宙觀、器械的宇宙觀、唯物的宇宙觀、自然論的宇宙觀の四つは、色々相異なる點があるが、肝要な點に於いては相同じ。即ち宇宙萬有は根本的に不可滅の物質(分子、原子又は電子の如き)から成立つ、其物質は自存的永遠的のもので一定の性質を有す、又萬有の動くのは種々なる勢力(重力、電氣力の如き)により、其勢力は必然的永遠的に働く、この物質と勢力とを以て物質界生物界人間界(人間の心理的現象をも)の萬有悉く説明し得るといふ點に於いて相同じきものである。然かし、此の宇宙觀は近來進歩した認識論のために

(1)原子的、器械的、唯物的、自然論的の宇宙觀

此等は既に倒れて了つた

倒れて了つて、今日は進歩した學者間に之を保持する者は恐らくはなからう。

(2)萬有靈活論(精靈論)、萬物有生論、卵子的宇宙觀(萬有を一つの卵子の如きものと觀る。即ち卵は全體として靜止的のものであるが內なるものは活動し分化し發育しつゝある如く、宇宙萬有も又さうであると觀るのである)等は、生物界から得た觀念に基き、宇宙を一つの大きな生物と觀じ、目に見えない生命といふものが活動力となつて働くと考へるのであるが、此等は古代に於いて流行したけれども科學の進歩によつて無くなつた。餘の合理的な形而上學的宇宙觀は凡て人間界から得た觀念又は類推論に基くのである。

(2)萬有靈活論、萬物有生論、卵子的宇宙觀

此等も今は無くなつた

(3)靈的原子論は、萬有の根本要素は考へ得られない程の細微な靈的分子である、無數の靈的分子が集合していはゆる物質の微分子となり生物となり人間となるといふ説である、之は今から四五十年前に起つたものであるが、今日に於いて此説を唱へる人は僅少である。

(3)靈的原子論

(4)多元的宇宙觀は、故ジエームス教授及び其他少數の學者の説であつ

(4)多元的宇宙觀

て、現象世界の中に働いて居る物には個々獨立な無數の元因があり（其或者は靈魂、或者は勢力、其他にもあるであらう）その多元因が奮鬪しつゝ段々調和を生じて終に現今の宇宙萬有を形成した、而かも今尙ほ形成しつゝあるといふ。中には專ら道德の獨立を維持する爲に此論を唱へる學者もある。

(5)二元的宇宙觀

(5)二元的宇宙觀は物質と靈魂との對立を認め、兩方とも自存永久のもので而かも相反對し衝突するものと觀、吾人が經驗する宇宙は兩者の衝突及調和の結果であるといふ。此の宇宙觀は昔し希臘人の間によく流行した。

(6)精神物理並行論

三種類

(6)精神物理並行論（サイコフィジカルパラリズム）には、(一)土臺は一つであるが、內部的精神的の過程と外部的物質的の過程とが並行して同時に又同程度に起るといふのと(二)過程は一つであるが、之を內部から見ると精神的であり、之を外部から見ると物質的であるといふのと(三)精神と物質とは別々のものであり兩方の活動は無關係であるが、而かも並行する（兩者相互の影響はないが、而かも同時に働き其働く程度も同じであるといふ）といふのとの三種類がある。

(7)一元的宇宙觀

同一哲學

(7)一元的宇宙觀は究極實在即ち宇宙の本源の單一なることを主張するが、或者はその一元を唯物的に觀、或者は唯心的に觀る。今日に於いては、此論は精神物理並行論者の最もよく用ゐるものである（一元論は、宇宙の本源をたゞ一つと觀るが、此の一つといふ觀念は、人間が自身の內部的生活上の經驗から得た所の觀念であるから、人性的（ヒューマンスチック）の形而上學の中に入れねばならぬ。但し、其一つの本源に就いてその觀念が異なるに由つて種々の一元論が生ずる。或者は唯物的に或者は唯心的に或者は二元的＝神を土臺として此神から物的現象と心的現象とが生ずるといふ見解＝に觀る。今日までの一元論は大抵この三者に屬するのであるが、近來起つたもの一つの種類は、所謂物質と心靈とを同一視する所の同一哲學（アイデンチチーフヰロソフィー）又は無差別哲學である。即ち外部より觀れば物質であるが內部より觀れば心靈である、從つて、外部から運動と見えるものは內部から見れば思想であると論ずるのである）。

(8)唯心的宇宙觀

(8)唯心的宇宙觀は、宇宙の性質を根本的に觀ると靈的である、所謂物質なるものは此の靈的のものゝ所產であるといふ。（唯心論といふ言葉は、廣い意味に於いて、唯物論や素朴的實在論などに反對し、宇宙の性質を靈的に觀ずる凡ての形而上學を指す言葉であるが、然かし嚴密な意味に於いては、現象世界を理性の產物又は理性の具體と觀る所の形而上學（情性意味を輕視し又は無視する傾向がある）を稱して唯心論といふ。但し此根本思想を用ふる程度に應じて種々の唯心論に分かれる。絕對的唯心論は、所謂物質も究極存在者なる理性の働きに由て起るものであると主張する。此種の唯心論者は、恰も唯物論者があらゆる存在物を物質と勢力と運動とに歸するやうに、その物質や勢力や運動や凡ての現象を心

に歸するのである。但し、哲學歴史の上に現はれた絶對的唯心論は、主知說と主意說との二大潮流に分れ、兩者は時としては少しく時としては多く相反對した）。

(9) 唯我的宇宙觀（ソリプシズム）は、一種の唯心論であつて、思考する所の我のみ眞の實在物である、少くとも唯我のみ實在することを識り得る、我以外のものが實在するかどうか何も識ることは出來ないと主張する。

(10) 主知的宇宙觀（インテレクチュアリズム）も唯心論の一種であつて、專ら人間の知性によつて宇宙の究極實在を思考する。究極者（即ち神）を一種の思考家と見做し、現象宇宙を思想の發現とする。

(11) 主意的宇宙觀（ヴォランタリズム）は、人間の意志性から類推して宇宙の究極實在者を意志と觀る、即ち神を活動者と觀る。故に之が唯心論の一種であることは言ふまでもない（究極者に於ける理性を後と廻はしにして、意志を以て其の根本的性質と見做す。現象世界をこの意志の發現であると考へるが、思想の發現とは餘り考へない。大體に就いていへば、希臘人の宇宙觀は主知的であつて、羅馬人とヘブル人とのは主意的であつた。カントの時代から此方、主意的宇宙觀が段々流行して來たのであるが、其中にも二種の異なる傾向がある。一種は意志を盲目的なものと見做し、世界を產出するに於いて意識的目的又は道理的活動を認めない。他の一種は、意志を目的的なものと見做し、一定の目的を立てゝ意識的合理的に現象世界を創造するものと考へるのであつて、此方は一神論と好く似て居る）。

二種類

(12) 人格的宇宙觀　(13) 超人格的宇宙觀

(12) 人格的宇宙觀も又一種の唯心論である。宇宙の究極實在者を完全な人格者と觀、人格に必要な要素は悉く完全に神に具はると考へる（この觀を取る人は、自己が實驗し意識する自己の人格を土臺として神又は萬有を考へる。我々が究竟實在者を識るには、どうしても自己の人格性に據らねばならぬ、人格を土臺としないで神觀又は宇宙觀すらも物質的宇宙觀のものと考へなければ、究竟實在者を完全圓滿なる人格的のものと考へなければ、抽象に傾き不合理のものとなつて解釋することは出來ないと論ずる。此論は極近代に起つた一神論の哲學的一形式である）。

(13) 超人格的宇宙觀は、究極實在者を人格以上の者と觀、人間の如き不完全な人格者は神を識ることが出來ないと考へる（之が究竟實在者に就いて積極的に論ずる時は、成熟した一神論即ち萬有在神論又は人格的宇宙觀に好く似寄つて來るが、然かし其觀念の足らざる事を指摘して、究竟者は人間の人格より遙かに優越したものである、人格てふ觀念は必當に究竟者に應用することは不可能であるといふ。之が消極的に究竟者を論ずる時は、不可能でも不可知論と隨分似て來る）。

右の外尙ほ三種の論がある

* * * * * * * *

右十三の形而上學的宇宙觀の外に尙ほ加へて言はねばならぬものが三つある。

(一) 不可知論

(其一)は不可知論であつて、人間には究竟實在者の眞性質を知る能力は

絶對的にないから、其に就いて價値のある妥當な知識は得られない、即ち宇宙を根本的に識ることは出來ない、のみならず識らむとする希望も企圖も全く無益であるといふ。故に其いふ所はたゞ消極的で形而上學に反對するに止まるものだから、之は形而上學の系統に入るべきものでなからう（或程度まで認識論に入つて而してたゞ消極的の結果に止まつて居るのである。此論は近代になつて比較的に勢力を有するので、學者の間に形而上學又は哲學を冷笑する風が大分行はれて居る。詰りこの連中は、根本的統一的に宇宙を觀考することが不可能であるといふ）。

(二)實證論

（其二）實證論（ポジチビズム）は前論より尙ほ一歩を進めて、宇宙の究極的說明は啻に無用であるのみならず不可能であるとし、吾人は唯實驗し得らるゝものを以て滿足すべきであると主張する（不可知論はたゞ消極的の議論をするのであるが、實證論は現象を識り且つ用ふる方法を立てるから、積極的建設的の方面がある）。

(三)實用主義

（其三）實用主義（プラグマチズム）は、實際に於いて一の宇宙觀と稱すべきではない、何となれば宇宙の究極性に就いて何等の主張もなく、たゞ諸說諸論の可否判斷を其結果の良否に徵すべしと主張し、經驗上に影響を及ぼさない說論は強いて顧るに及ばない、斯かる說論は肯定も出來ねば又否定も出來ないといふ意見を有するのみである（凡ての哲學や形而上學の眞否眞否を驗するに其の實際上の結果に據る主義のものであるから形而上學の系統に入るべきものではない。故に私の表においては、之を不可知論及び實證論と同じ部類に置いたのである。此主義は近來非常に流行して特別の名稱を受けたが、實は古代の哲學者の或者共は此主義を取つたので、凡て哲學上の諸論は之を實驗に照らし實驗の保證に據つて其優劣を判ずべきものと考へたのである）。

この三つの說の中、第一と第二とは認識論に關係して一定の宇宙觀を否定するものであるが、第三はたゞ認識の方法に就いて意見を有するのみである。

(B) 重もに宗教經驗に基く形而上學的宇宙觀の種類

(B)の宇宙觀の種類

(1)拜物教

(1) 拜物教（又は庶物崇拜）は最も劣等な形而上的宇宙觀であつて、多くの學者の意見によると、之は精靈說（アニミズム）（萬有靈活論）又は鬼神崇拜（デイモニズム）から退化したものであるといふ。之は人間に幸福を與へる不思議な力が庶物の內にあるといふ信

仰を有し、物質が心靈の上に在つて主となつて居ると考へるから、私の表に於いては之を物質的範圍に入れてある。

(2)精靈說（アニミズム）には宗教的のものと理論的のものとがある。前者は動物や自然物（月、星、太陽など）の中に宿ると想ふ生命力を崇拜するのである。

(3)鬼神崇拜（デイモニズム）と多神教との二つは、相異なる點もあれば相似たる點もある。兩方とも多くの靈物の存在を認め、其中には善靈もあれば惡靈もあつて、其が人間に對して偉大なる支配力を有すと考へた。其等の靈はただ物の內に存在するのみならず、全く物を離れて獨立に存在するといふ考もあつた。

(2)精靈說

(3)鬼神崇拜

此等は今日の文明人の間には消滅して居る

右三つの形而上的宇宙觀は、未だ宇宙を一つの全體として考へない前のものである。故に之を宇宙觀と稱すべきか否か一つの問題ともなる譯である。これらの觀念は今日文明國民の間には消滅して居るから、表に於いては其消滅を示すために之を圍うて置いた。

(4)二神教（デユーアリズム）即ちゾロアスタ教は、宇宙は二つの原因に依て存在し且つ活動すると觀る。希臘哲學が宇宙を物質と靈との二つに依て成立つと觀たのは、全く合理的に考へ出したものであつたが、ゾロアスタ教のは宗教的經驗から出たもので、善神と惡神との對立と爭鬪とに由て宇宙が現在の如き狀態になつたと信じたのである。

(4)二神教

(5)一神論は、宇宙萬有は獨一の靈なる神に依存し活動し發達するものであると說く（一神論は、歷史的にいふと基督教から起つた形而上學である。唯一の究竟實在者を宇宙萬有の絕對的本源となし、凡ての法則と活動との決定者となす。故に、これも又根本的の一元論であるが、汎神教や普通の一元論とは違つて、神と萬物とを同一視せず、物と心とを同一視せず、意識あり目的あり眞善の意志ある者となす。汎神教や普通の一元論とは違つて、神と萬物とを同一視せず、現象世界は實在するけれども必然的又自存的のものではなくして神に依存するものであると見做す）。

(5)一神論

(6)超越神論（ディーズム）は、神の獨一を信ずると共に、その獨一神が萬有の創造者であり支配者であると信ずるが、神は特別の場合を除くの外は宇宙より離れて存在すると考へる（此論は第十七八世紀に於て盛んであつた所の一神論である。一神論と異なる所は、神は萬物を超越して遠くに在ます、神と萬物との關係は常住的でなくして臨時的である、と考へる點である。神は太初に宇宙を創造し勢力を作興し又自然法を設置したけれども、其後は放任して臨時の必要の外干渉しない事は、恰も時計師が一たび時計を造つて放置するやうなものであると考へる。此普通の超越神論からいへば、神を第一原因であると考へ、宇宙の自然の原因と勢力とを所謂

(6)超越神論

第二原因と稱する。そして神は時々必要に應じて宇宙萬物の運動に、干渉し、自然の法則に反する特別の出來事即ち奇跡を現はすと考へる。斯樣な超越神論は、未熟な基督教的思想の產物であつて、二元的の强い傾向を有つものであるが、今日に於いて思慮の深い基督教者は決して此神觀を取らない、熟した形而上學が唯物論を取らないやうに、熟した基督教神學者は超越神論を取らないのである。

此論は未熟な一神論である

(7) 汎神論（パンシーズム）は、萬有と神との區別を立てずして同一視する（之は、無數の神を信ずる宗教から起つて來た一種の哲學である。即ち多神教から起つた者では）。この汎神論にも唯あるが、宇宙全體の解釋を試みるので、多神教とは異なつて居る）。物的なのと唯心的なのと同一的即ち物心無差別的なのとがある。

(7) 汎神論

(8) 有神論者は、超越神論又は汎神論を不完全なものと見做し、神の超在と共に內在を信じ、神の內在を主張すると共に神と萬有との差別を主張する（恰も人間の靈は體の全部に働くけれども體と同一視しないと如く、宇宙の全體に働く神靈と宇宙そのものとを同一視しない。人間は勿論、萬有の存在は、神の永久的現在と神が萬有の內に在て働く內在的活動とに依るのであるが、神は萬有そのものではなくして其以上のものであると考へる。超越神論は神の超在を極端に主張して其內在を否定するものであり、汎神論は其倒まであり、有神論は兩性を同時に主張するものであると論ずるものである）。

(8) 有神論

(9) 萬物在神論（パンエンシーズム）は、大體に於いて有神論と同樣であるが、神は宇宙より大いなる者であるといふ事を高調し、神が宇宙に居るといふよりも寧ろ宇宙が神に居るといふことを主張する（此論は近來起つたもので、一神論の思想をより精確に表現せむとする。究竟實在者なる神が現象世界より遙かに優るといふ事は勿論、此世界に在る萬物は神の內に在つて又神に依つて存在し得る、といふことを論じ。而して、有限なる現象世界の進步的活動は、神より發し神に依て行はるといふ事を主張する。神の目的經綸は、此世界に於いて未だ盡きず、未だ充分に發表せられず、之がために繼續する進化もあるといふ見解を抱く。此論は、一面には神の內在性を高調し、他の一面には神の超越性を高調する）。

(9) 萬物在神論

* * * * * *

以上に列擧した種々の形而上的宇宙觀の中、今日の我々に取つて最早意義のない陳腐のものもあるが、表に於て示す所の多元論及び一神論から上のものは、今日に遺存して其々其特色を發揮して居る。私はこゝで其等の諸說の可否又は功過又は眞理に就いて卑見を述べる考はないが、たゞ諸君の參考のため注意すべき數點に就いて少しく述べて置きたいと思ふ。

注意すべき數點

(イ) 右のやうに種々雜多の見解があるとすれば、我々は如何にして其可

(イ) 諸論の可否判

斯に就て實用主義を用ふる事

否優劣を判斷すべきであるかといふ問題が起つて來るが、之に就いて實用主義（プラグマチズム）は主張して曰く、諸ろの理論に對する最上最後の判斷は實驗にある。其論を永く且つ念を入れて實驗して見れば眞否が分かる、若し實驗して見て結果に甲乙がないならば何れを採つても又採らなくても差支ないと。

（ロ）諸他の論中に在る眞理を歡迎すべき事

（ロ）眞面目に公平に又聰明に眞理を追求する人々の間に、多年信用を得て居る思想若くは信仰は、何かの眞理を有つて居る、何か正確なる事實の上に立つて居ると認めて差支あるまい。眞正の學者は出來る丈圓滿完全なる眞理を熱求するものであるから、唯自己の捉へた眞理を主張するのみならず、他人が提供する眞理を歡迎して自己所有の眞理を豐富ならしめむと欲する。我々は斯かる精神と態度とを以て、前上に列擧した諸論を扱はなければならぬ。

（ハ）前述のAB兩

（ハ）百年この方、叙述的科學が長足の進歩をなした通り、形而上學も隨分進歩した。而して凡ての形而上學に於いて、主もに宗教經驗に基く者と主もに合理的（ラショナル）經驗に基く者との兩方が相接近する傾向を見る。私の表に於いて〃の形を現はしたのは即ち之がためである。

種の觀念は漸々接近しつゝある事

（ニ）ABの兩觀念は相刺戟しつゝ進歩して來た

（ニ）或人は有神論的な形而上學的宇宙觀は合理的（ラショナル）な形而上學的宇宙觀の攻撃に刺戟されて進歩したといふ。或程度迄はさうであるが、又其倒な事實もあるので、双方相互に刺戟されつゝ進歩したといふが適當である。

（ホ）唯物的な形而上學的宇宙觀は、第十九世紀の始めから殆んど終り迄歐米に於いて非常に流行したものであるが、二十年この方倒れて了つて今日では之を主張する學者はなく、たゞ未熟な教育を受けた連中に一個の傳説として遺つて居るばかりである。この宇宙觀が前世紀に於いて流行した譯は、抽象的思索的の哲學が極端に馳せて躓き倒れた反動と、近代物質上の知識が非常に增加すると共に自然界に對する支配力が增進したのと、宇宙に就いての思考が未だ精確透徹でなかつたのと、此の三つ

（ホ）唯物的な形而上學的宇宙觀は倒れて了つた

この種の宇宙觀が前世紀に於て流行した理由

の理由による。

（ハ）解釋的科學に種々な異論が生じた理由

形而上學的問題は規範科學の助けなくば借らねばならぬ

（ハ）部分的の解釋的科學殊に全體的の解釋的科學の間に、種々樣々に異なる議論が起つたので、此等の科學に深く心を寄する人々は、如何なる譯で斯くも多樣の異論を生じたのかと研究し始めた所が、其は論理の方法と判斷の標準とに存することを發見した。即ち諸論諸學派の差異は、事實に存するよりも寧ろ事實に關する見解を支配する所の原則に存する。而かも其原則（即ち規範）は裏面に伏在するので大抵は氣が付かぬから、甲の學派が眞理とする所を乙の學派は眞理と認めることが出來ない、といふ事を發見した。そこで思考は一層深くなつて、其裏面にある原則に就いての問題に及び、此問題を特別に研究する學科も起つた。例へば原則（即ち規範）の種類、數、又は價値などに就いて組織的に研究する學科であるが、此の研究が進んで來る迄は確實なる判斷は得られない。其故に、形而上學だけで確實に形而上學的問題を解釋することは出來ないのであつて、規範科學の助けを借らなくては自身がたゞ同じ軌道をグル〳〵循環するばかりで、前進することが出來ない、のみならず詰りは迷宮（メーズ）に入つて出口を失つて仕舞ふ。斯樣な次第で、精密に考へてゆくと意外にも自己が解釋し得ない肝心なものが自己の中に存することを見出しては、餘儀なくも其解釋を自己の上に立つ所の他の學に委任せねばならぬ始末になる。

（ト）解釋的科學の能力には案外制限がある

（ト）解釋的科學の全般を研究して見ると、こゝに寧ろ驚かざるを得ない一事を發見する。といふのは他でもない、この解釋的科學の能力には案外制限があつて容易にその希望を果たすことが出來ないといふ一事である。例へば、時間といひ空間といひ物質といひ勢力といひ生物といひ人間といふものに就いて、滿足に解釋を仕遂げる點は甚だ少ない。而かも多くの難問を續出し、我々が之を解釋せむとして努力すればする程深遠測り難きを感ぜざるを得ないのである。

* * * * * * *

叙述的科學と解釋的科學とは實際上之を分離することは出來ない

解釋的科學の類別に關する說明は、先づ雜つゝこれだけにして置かう。諸君は最早氣附かれた事であらうと思ふが、茲に念の爲め明かにして置きたい事は、私の表に示すやうに叙述的科學と解釋的科學との區別が嚴重に行はれて居らぬことである。蓋し、人生は統一的のものであるから理論に由てするやうに實際上之を分離することは出來ない。純粹の物理學者であつても、事實の共存續起を研究すると共に、其解釋に就いても興味を感じ必要を認めるから、何かの臆說若くは實際上の目的を立てゝ自己の研究して善しと認める所を證明せむと欲する。又他の一方に於いては、如何に純粹な哲學者と雖も、叙述的科學が提供する所の事實ばかりに賴つて滿足しないで、躬自から其事實を或る程度まで觀察し調査する。故に、この兩種の科學の間には理論上明かな區別はあるが、實際に於いては必ずしもさうでない。實際に於いては、諸種の科學者は少くとも二三の異なる興味を有つて居るのが事實である。勿論、或人は或學問

科學と哲學との關係

純粹に一つの專門の範圍に止まることは出來ない

を委しく研究して其道の專門家となり其道に就いて獨特の權能を有するが、同時に三四の違つた學問を同樣に委しく研究するといふ事は出來難い、例へば、科學者として權能ある者が同時に哲學者としての權能を有つといふことは滅多にない。併しながら、どの學問の專門家でも、純粹にたゞ其專門學の範圍に止まることは出來ない。例へば、科學者が事實の說明を一切哲學者に打ち任かして仕舞ふならば、事實研究の方針を失ひ又研究の興味動機をも失ふであらう。總ての事實が同樣に意義あり興味あるのではないから理性を働かして之を判斷しなければならぬ、判斷しないで總ての事實を觀察し叙述するのは殆んど其一つをも觀察し叙述しないのと同じ事である。是故に、叙述的科學の專門家と雖も、何か解釋上の臆說を胸奥に設けて其臆說と事實とが合致するかどうかを見なければならぬ。縱し其が解釋を求めなくても何か實用上の目的を必要とするに相違ない。或る目的が胸奥にあるので興味が起る譯である。又哲學

者であれば、未だ解釋されないが疑ふことの出來ないといふ事實を土臺として其解釋を求むる必要がある。而して新事實と舊事實との調和を認めて之が解釋を得むとする所に哲學研究の興味がある次第である。斯樣な次第であるから、少しも他の學問には關係なし興味なしといふ絕對的の專門家は到底有り得べからざる事と思ふ。

宇宙は分割することの出來ないと單一のものであるといふ事實を土臺

モー一つ申して置きたい事は、私の表に於いて示す所の諸科學の類別は、宇宙に關する批評的科學的思想の特色だけを現はすものであるといふ事である。但し實際に於いて此表の通りに諸科學の經界線を劃然と立て切ることの出來ない事は、經驗の能く示す所である。何となれば實際の宇宙は分割せられない單一のものであるからである。この單一の中に無數の種類があり無限の部分があつて統一されて居るのだから、その一種類若くは一部分を擧げても其が全體に不離の連絡を有するのである。譬へば一つの網の如きもので、何處の結目を一つ引張つても網全體を引張ることになる。如斯何れの科學から宇宙の研究を始めても、之を完成しやうとすれば終には宇宙全體を引張り出して觀なければならぬ事になる。詩人テニソンが、

注意すべき點

"Hold you here, root and all, in my hand,
little flower-but it could understand, what you
are, root and all, and all in all,
I should know what God and man is"

といふ名句に現はれて居るやうに、古壁の破目から摘み取つた可憐な草花の一莖でも、好く々々之を吟味すれば神と人との性質を識る、即ち宇宙は單一であるから、其の微々たる一小局部も尙ほ其の無限の全體を暗示するのである。而かも宇宙の結目であり局部である具體的事物は無數無限であるから、宇宙に關する研究も又無數無限である。我々が哲學や理化學や生物學や天文學などの書物を讀んで見ると、其の所說が各異な

る、のみならず同一の科學に就いて說いて居る書物であつても甲の書と乙の書とは異なる點がある、其は其立場を異にし興味を異にするからであつて、此書に由つても宇宙の內容の複雜な事が分かる。然かも宇宙は單一であり統一であるから、各學者又は各著者の說く所が相關聯し、其研究の範圍が兩方相異なることのあるのは自然の道理である。

第八節　應用的及び規範的科學の重もなる種類

この科學の一般的特質

應用科學と規範神學との別

本節に入るに方つて、本章第五節の第三項に於いて述べたところ、即ち應用的若くは規範的科學の一般的特質に就いて再考する必要がある。簡約に之をいへば、此種の科學は凡て將來なる目指すものであつて、理想を立て、目標を置き、その理想目標の性質及び價値と共に其れに到達する方法を研究する。應用科學は人間と外界との關係に就いて研究し、規範科學は內界の生活に就いて研究する。前者は自然界を支配する事と、社會の組織を完成する事とを目的とし、外界の境遇に關係する範圍內に於いて人間の生活を豐富にせむとするが、後者は人性の發達と人格の完成とを目的とし、知識的道德的者くは道德的事情の範圍內に於いて人間の生活を豐富にせむとする、從つて識見を廣め精神を活くし意志を强くする事を努める。

(甲)　應用的科學

應用的科學の目的

應用科學は、叙述的及び解釋的科學が示す所の事實及び原則をば客觀的の或結果を生ずるために應用するものである。即ち自身の利益のために自然界を支配せむとする、換言せば自然界の勢力及び過程を自身の意志の支配の下に置く道を講ずるものである。常識は何百年何千年の昔から此道を幾分か講じて居るけれども甚だ不完全である。其譯は、自然界の過程と續き合(緣起律)とを充分に知らないのと、應用の仕方が不規則不始末であるのとに由る。應用科學は其を規律的組織的にするから、常識よりも善く成効する。近代文明が非常な進步をなしたのは、即ちこの應用科學の結果である。

應用科學の四種類(一)應用物理學

應用科學を分けて四つとする。(其一)は應用物理學であるが、此種に屬

する學科は實に多く、人間の知識及び技能の進歩につれて益々其數が殖えて來る。有り觸れた例を擧ぐれば、應用化學、礦山學、測量學、工學航海學、建築學などは其れであるが、此等の學科はたゞ知識を實際生活に應用する方法を敎ふる所の科學であつて、應用その者ではない。(其二)

(2)應用生物學

は應用生物學で、其種類は非常に多く續々增し加はりつゝある。之は凡そ五十年前から起つた科學であつて、之に依て實に珍らしい生物を產出し、性質に於ても分量に於ても實に驚くべき結果を現はして居る、將來は如何なる結果を現はすであらうか前途誠に有望である。その普通の例を擧ぐれば、園藝學、養魚學、飼養學、醫學、人種改良學などは其である。

(3)應用社會學

(其三)は應用社會學である。人間の社會的生活は人間あつて以來行はれた古い事であり、古代から幾多の思想家が之に就いて幾分か考へ或は研究したものであるが、社會學といふものは漸く近頃に起つたものであるから、純粹の科學としては頗る年の若いものである。況して應用社會學となると、實に幼稚であつて今少しばかり手を着けた位に過ぎない、嚴密にいふと、應用社會學は未だ本當に社會問題に入り込んで社會改良運動に着手して居らぬと言つて差支あるまい（社會學者は政治家又は實業家に對つて、舊式の非科學的方法を改めて科學的方法を用ゐるやうに勸めるけれども、大抵は之を無頓着に聽き流して居る。少しは用ゐて居るけれども其効果は未だ餘り見久ない）。

應用社會學の種類

斯樣に實際上の應用に就いては頗る幼稚であるが、科學としては以下列擧する種類に分類する所まで進んで居る。(イ)經濟學は應用社會學の一種であつて、個人社會若くは國家の幸福が富の生產分配又は所有に關係する範圍內に於いて其理想と方法とを研究し、(ロ)公民學(Civics)は、市民相互の關係上又は市民が社會に對する關係上有する處の權利と義務と其實施法とに就て研究し(ハ)政治學は、國家に關する論理に基いて政治上の理想原則及び方法を研究し(ニ)國際法は國と國との關係から生ずる權利責任及び其實行法を研究し(ホ)法律學は公義に關する一般的原則とその實施法とを研究し(ヘ)敎育學は敎育の原則と實行法とを研究し（敎育の目的に就いては色々に考へら

れるが、其主もなるものゝ一つは善良なる市民を養成することであつて、この目的を達するために國家が適當の制度を設けるのは當然の義務である。モー一つの主もなる目的は、人間が多年の經驗を積んで造り成した社會的若くは心靈的遺傳物を組織的に分與し、以て成るべく完全な人物を養成する事である、人間生活上の最も貴重なる無形の富は自然の成行に放任して之を子孫に讓ることは出來ないのであつて、唯人間を若い時に教育する事によつて讓り得らるゝのである。(ト)以上に列擧した六つの社會的科學の外に、社會學上の一般原理に關する科學がある。前上の六つは人間の社會的生活の一部分を研究するものであるが、之は社會を一つの全體として研究するもので、詰り眞善美の實現に基く社會的幸福を得るための一般的原則に關す。之は部分的科學から得た所の結果を總合して(叙述的社會學と解釋的社會學と應用的社會學との全ての方面から得た原理を總合し)社會に關する統一的觀念を造り、之に依て又部分的の社會學を助成する。部分的の社會學は之が爲に自己の正當な地位と領分とを知つてより善く自己の義務を盡すことが出來る。斯樣な性質のものであるから、之を稱して總合的社會學又は組織的社會學とも言つて宜しからうと思ふ。併ながら、之は理想若くは規範その物に就いての研究ではなくして、その理想なり規範なりを社會に實

總合的社會學は理想若くは規範そのもの

現する事に就いての研究である。理想若くは規範その物を研究する科學は其以上に立つ所のいはゆる規範的科學である。社會學の何れの部分に於いても其裏面の原則を見出せば、其は則ち社會學の範圍外のものを見出したのであつて、其原則をして原則たらしむる所以は何であるかといふ問題は、之を規範的科學に委ねなければならぬのである。

(ち)應用數學

應用的科學の(其四)は應用數學である。私の表に於いて之がズット下の段に置いてある譯は、數學は空間に關する觀念又數に關する觀念を用ゐるからである。然かも之を應用科學の最後に研究するのは、此科學の特質は他の應用科學を研究した後に於いて現はし易いからである。本章第七節の甲の第六項に於いて述べた通り、批評的形而上學の見解によれば、時間空間は心から離れて獨存する客觀的實在ではなくして、心を俟つて始めて存在するものである。常識に取つては、斯かる見解は時間空間を無くし、從つて凡ての物を無くし數學をも一つの空想として了ふ見解と

思はれるが、其は誤解である。批評的唯心論の時空觀に於いても、數學は確實な客觀的原理たるを失はない（客觀的の事實がなくして唯主觀的に構成するものではない）。即ち數學は先天的に確定した一種の關係を研究するものであつて、其關係は人間の心が勝手氣儘に造出するものではなく唯見出すばかりである。我々が正當に物事を思考しやうと欲ひ、或はいはゆる客觀世界を正確に有効に取扱はうと欲ふならば、是非とも數學的の原則に服はねばならぬ。故に人間の利益又は幸福に就いては數學は實に重要な科學である（經驗が示す如く、數學は無數學の應用科學に於いては應用數學は主もなる機關である。數學なく生物界と生物界と社會と三種の應用科學に於いて用ゐらるゝが、併し其階級によつて非常に差異がある。物理界即ち無生物界に於いては用ゐられる程の精確を期することが出來ない、從つて眞正の意味に於いて科學と稱することは出來ない、實は幸に當る推量位のものである、正確疑なき容れざる底のものではない、確實な豫言の能力は數學的應用に由る、應用の出來ない。斯樣な見解からすると、私が作つた表は誠に不都合のやうであるが、然かし私の表に於いては、科學といふものを廣義に用ゐたので狹義に用ゐたのではないから、強いて差支なからうと思ふ）

物理界に於いては數學をよく應用して居るが、生物界に於いては統計表に應用する位で其他には餘り應用して居らない。尤も生物界に於いても、物理的現象の說明即ち化學的作用（分子微分子の化合作用の如き）を現はす場合には數學を用ゐるが、然かし生物的現象殊に心理的現象を叙述し又は解釋するに數學上の原理を應用し得るかどうか、今日に於いては未だ充分明らかでないけれども、恐くは出來まいと想はれる。但し道德上又は心靈上の原則を應用しなくとも將來の事を豫見則に達した人は、たとひ數學上の原則を應用しなくとも將來の事を豫見し又は豫言する一種の能力がある。

（乙）規範的科學

規範的科學に就いての話を始めるに方つて、私は諸君に本章第五節の第三項及び第八節の初段を參考せられん事を望む。殊に御注意を願ひたい事は、規範的科學の特質である。而して我々は此種の科學の研究に於

此種の科學の研究

に就いては困難な問題がある

いては最も六つかしい問題に觸れることを豫め覺悟せねばならぬ。過去幾百年間の知識上道德上審美上又は心靈上の六つかしい討論は規範的科學の範圍內に起つたもので、今尙ほ引續いて討論しつゝある。然も人間の眞正の幸福に關するもの、人間をして最も貴重な生涯を送る甲斐あらしむるものは、此種の科學の賜物である。故にこの規範的科學が研究する問題の性質を明かに了解することは、六つかしい事ではあるが甚だ大切である。

此種の科學の貴重なること

思想上及び行爲上の規範に關する問題は、人間の意識的生活が始まると共に始まつたが、之を組識的科學的に研究することは比較的に近來の事である。之が研究に困難な理由の一つは丁度こゝに在る。これまで常識が物理界生物界又は社會の問題に就いて餘り狹い經驗と確證されない直覺とに據つて其問題を混雜に導き、而して多くの誤謬と矛盾とに陷らしめた如く（勿論其中に多くの棄つ可からざる眞理があるに相違ないけれども）規範問題も批評的考察と歷史的

研究困難の一理由

研究とに據らずして不規律に雜駁に取扱つた結果、混雜に入り種々な誤謬と矛盾とに陷つた。そこで規範問題の研究は頗る困難な事情に纏はれたが、然かし批評的研究は人々をして物理界生物界又は人間界に關する誤謬から人を救出した如く、規範問題に關する誤謬からも人々を救出しつゝある。

然かも批判的研究は誤謬點を明かにする

規範的科學は二種類に分ける

規範的科學は部分的のものと總合的のものとの二種類に分けるのが便利である。但し之は一つの全體としての最高觀念（究極實在）と連絡しなければならないからして、獨立な總合的規範科學はない。詰りこの科學は全體としての宇宙を考究する所の一般的科學の中に包容せらるゝのであるが、その一般的科學とは則ち組織神學の事である。故に以下に述べる所は、たゞ部分的規範科學だけであつて、總合的規範科學の問題は之を組織神學に讓るのである。

但しこの科學は組織神學の中に包容せらるゝ

(A) 部分的規範科學の種類に就いて

(A)部分的規範科學の種類

部分的規範科學の特質は或る一種類の規範を思想上抽象し經驗全體から引離して、組織的批評的に研究するに在る。之を五つに分けることが出來る。

(1)數學

(其一)は數學である。之は數又は空間に關する原則若くは規範を研究するものであるが、直接に數を以てするものは算術であり、圖畫を以てするものは幾何學であり、記號を以てするものは代數學、若くは微積分學若くは四元法(クワトニオン)である。

(2)論理學

(其二)論理學は價値ある知識の原理と過程とを研究するもの、即ち合理的思想を支配し知識をして價値あらしむる所の規範を研究するものである。經驗の示す如く、多くの人々の所謂合理的思想なるものには眞理と共に誤謬を混ずるから、論理學は萬人が共に承認することの出來る價値ある論法を科學的に研究して之を明かにする、合理的思想が目標とする所のものは、價値ある知識、即ち有りのまゝの實在を識る知識、一言以て之をいへば眞(ツルース)である。斯かる眞理は人を不合理な思想の束縛から解放して自由を得せしむるものである。眞(ツルース)は論理學上の規範全體の總名であり、論理學の最高目的であつて、種々の論法や原則は唯この目的に達する手段である。

(3)認識論

(其三)認識論も價値ある知識の原理とその過程法とを研究するものだから、論理學の一部分と見做さるゝ事がある。兩者の關係は頗る密接で其範圍を區別することが六つかしい位であるが、兩者が今日まで爲した事實の上からいふと、論理學は議論の過程に關する原則又は規範の發見に力め、認識論はその原則又は規範を用ゐて論理學が關はる問題と違つた他の問題を研究する、即ち思想上の過程を研究するものではなくして思想上の對象を有りの儘に識ることを目的とする。而かも結局は兩者とも

論理學との區別

有りのまゝの實際即ち眞（ツルース）を得ることを目的とするのだから、兩者を一つの學科の二方面と觀るのは道理であるが、然かし今日迄の經歷では其樣な一學科の名は未だ起つて來ない。若し其れを一つの學科と看做すならば、其目的は要するに眞を得るに在る。

認識論は哲學又は形而上學と區別すべきものである認識論の貴重な職分

前に言つたやうに、宇宙の究極實在の性質に就いて學者が種々違つた見解を抱くのは、彼等の思想を無意識に支配する規範が違ふからである。その規範の中で最も肝要なのは、主觀的又は客觀的の實在に關して價値ある知識を得るために用ゐねばならぬ規範である。カントの時代からこの規範の研究即ち認識論を非常に熱心に講究したので、哲學は則ち認識論であり認識論は則ち哲學であるといふ人もあり、形而上學と認識論とを同一視する人もあるけれども、然かし兩者を區別する必要がある。認識論は形而上學の目的を達するに就いて非常に大切な職分を有す、例へば時間空間の問題を都合よく解釋するものは認識論である。今日に於いて一般の哲學者は、究極實在の眞性質（時間、空間、物質、勢力、心などをいふ。この心の中には人間の心と共に神の心を含むのは無論の事である）に關する妥當な知識を得ることに就いて認識論は其門戸を開くものである、この門戸を通らずしては決して其知識を得ることが出來ないと考へて居る。

之を六種類に分つ

（4）美學

（其四）美學は情性の一種特別の方面に於ける現象及び其原理を研究する、即ち美を識り又感じ又愛し又造り出す所の人間情性の一方面に關する（勿論美を造り出す所の一部分のみに關するもので全體に關するものではない）。

人生の喜樂滿足の大部分は美感の活動に由るのであるが、その美感若くは活動の種類が凡そ六つあるので、美學は六種類に分かれる。（イ）建築學は建築に應用する所の美の原理と規範とを研究し（之は物質的材料を以て其理想を實現するから美學の中で最も階級の低いものである。この美學は其材料のため又建築上の目的の爲に、美學外の種々な條件に制限されるので隨分不都合な感ずる）（ロ）彫刻學は固形體の上に人生を表現するに應用する原理と規範とを研究し（ハ）繪畫學は色と線とを以て平面に思想感情を表現するに應用する美の原理と規範と

を研究し（音に色の配合や繪の比例や又は遠近法のみならず、其に依て表現する思想感情に關する問題も必要である。故に斯學の研究範圍は、建築學又は彫刻學に比して非常に廣い。凡て色彩上の事粧飾上の事は斯學の範圍に入る、例へば壁や着物や製造品などの色合も模樣も形態も廣い意味に於いて斯學の領分である）。（二）演劇は人生及び人生上の問題を模擬的動作に依て表現するに應用する美の原則と規範とを研究し。（ホ）音樂は音を以て現はす所の美に關する原則と規範とを研究し（音聲で現はすのと樂器で現はすのとの差別で音樂が二つの部分に分かれる）（ヘ）文學は言語又は文字を以て現はす所の美に關する原則と規範とを研究し（勿論斯學には詩、散文、演說など色々の部分がある。人生の狀態に關して種々なる表現をなし或は批評をなすが、其には喜的のものと悲的のものとの區別もある。一つの美學としての文學は音に思想そのものゝ美のみならず音聲又は文字など凡て形式の上に現はすものを美の原則と規範とに據らしむる主義である）（ト）以上六種の美學が確定した所の原則及び規範の調和統一をはかり且つ其原則及び規範の起源と基礎とを發見することを目的とする總合的美學ともいふべきものがある。

右六種の美學に就いて

右六種の美學の中、建築學と彫刻學と繪畫學とは目を通して、演劇は目と耳とを通して、音樂と文學とは耳を通して、美の感情思想を動かす（紙面に現はされた文學は目を用ゐるけれども、元來は耳ばかりを用ゐたものである、即ち今日は目を耳の代りとして用ゐて居るのである）。勿論、此等の美學は凡て觀察に由て始まり、解釋に由て進み、論理學又は認識論の規範を批評的に使用する事に由て美に關する規範を定める。我々の記憶すべき一事は、普通の物理學又は生物學に就いて應用學のあるやうに、美學に對する應用術がある、その應用に於いては美學の原則規範に據らねばならぬ。普通、純粹科學と應用科學とは隨分相離れて居るけれども、純粹美學と應用美術とは實際に於いて密接な關係を常に有つて居る。

（五）倫理學

（其五）倫理學は、道德上善として認識せらるゝ所の現象原則規範及び實現の方法を研究する。同性質の社會に於いては如何なる行爲が善であるか又は惡であるかといふ事は大方一致して居るが、善の善たる理由や性質に就いては意見が隨分相違して居る。或者は快樂主義を取り、道德的行爲が喚起する所の愉快なる感情を以て道德の目的とし善の規範とする。或者は自我實現主義を取り、自己の性能を發達せしむる所の行爲を以て道德の目的とし善の規範とする。或者は社會公益主義を取り、人と社會

との幸福を增し利益を與ふる行爲を以て道義の目的とし善の規範とする。或者は直覺說を取り、人の道德的生活は自心の天性に由て起ると主張し。或者は經驗論を取り、行爲が自己又は他人に及ぼす結果の如何に由て其善惡を識ると主張する（この經驗論は、個人的又は社會的の快樂を本とするものと、進化論を本とするものとの三種がある。直覺說に於いては、道德上の理想の權威は內から起つて來るから自動的自治的であるが、經驗論に於いては他動的他治的である。或人々は、カントの見解の如く眞正の道德的生活は理性が善として認識した先天的な無條件命令に服ふことであると主張する。これら倫理上の諸問題を細かに述べる事は私の講演の目的でないので、たゞ道德上の深淵にして而かも難解な問題が多くある。といふ事だけを識れば足れりとする）。

行爲上の規範

倫理學は美學と違つて大抵は一個の學として研究されて居る、其譯はその興味が枝葉の點に在らずして中心問題に在るからである。が然かし斯學にも種々の部分があり、西洋に於いては、イエスキリストの時代から、外部の行爲と內部の精神とを區別することが普通であつて、基督敎は非常に內部の精神に重きを置くことは人の能く知る所である。今少しこの兩部に就いて述ぶれば、先づ(一)行爲上の規範の方から述べるが便利であらう。苟くも社會に身を置いて居る人は、自己の周圍にある人々と或關係を以て生活しつゝあることを識る、從つて他人に對する倫理上の義務のあることを覺ゆる。儒敎はこの關係義務を分けて五倫の道としたが、今日の進步した社會に於ける行爲上の規範として其れだけでは不充分であつて、親が子に對する關係や男子が女子に對する關係や、國民同士の關係や、人類全體との關係や、個人又は種族又は國家の敎育に對する關係などから其々の規範を研究せねばならぬ。其は兎に角道德上の規範をたゞ外部の行爲のみに置くのは不完全であつて、寧ろ內部の精神に置くべきである。イエスは外部の行爲に基いて道德上の敎訓も議論も定義もせられず、常に內部の精神に着眼せられて、茲に千鈞の意味を置かれた。

精神上の態度

(二)次は精神上の態度であつて、茲に倫理道德の中心點がある。之を二種に分けて、理性に基くものと情性意性に基くものとする（人間の知識的、社交的、實業的、國際的、宗敎的、其他の諸方面に於ける生活の發達につれて、此二種の態度は隨分變化して來た）。此の二種の精神的態度が

基督教倫理の規範

其に働いて眞正の行爲を決定するのであるが、經驗の示す如く、この決定は必然的でなくして自由的である、即ち知的發達及び社會的關係の如何に拘はらず自己の私慾私情に支配せらるゝ事も出來、又己れを忘れて人のため社會のために盡すことも出來る、こゝは數學などの必然的規範と異なる點である。基督教主義の倫理學が道德的標準とし規範とするものは無我の愛であつて、其內には同情、親切、謙遜、誠實、正義、節制、節操、其他あらゆる道德を含んで居る。此等の諸法を總合すればイエスの所謂「愛」となる、即ち天父の如き愛—自己を與ふる愛、報酬を求めざる愛、公平圓滿無私無我の博愛であり純愛である。

（B）規範的科學に關し注意すべき點

（B）規範的科學に關し注意すべき點に就いて

（イ）數學と論理學と認識論との三つは理性の範圍內に於いて、美學は美

（イ）諸ろの規範的科學は直覺の上に立つ

（ロ）直覺の價値の判斷に就いて

的感情の範圍內に於いて、倫理學は所謂良心の範圍內に於いて論究するのであるが、各々或直覺を基礎とする。部分的規範科學は其直覺の起源に就いて何等の解釋を試みず、縱し試みても部分的規範科學のみでは出來ない、たゞ直覺的に起つたものを其儘に價値あるもの權威あるものと感ずるばかりである（倫理上の規範が快樂的若くは主利的に說明さるゝならば、其規範は道德的ではなく從つて道德上權利あるものではない。斯る說明の場合に於いては、所謂良心なるものは唯無知の產物と解釋されて仕舞ひ、所謂道德的生活は他の應用科學と同樣に全く利益のためであると考へらる）。

（ロ）凡て直覺は、其が起つた始めに於いては其が直覺であるから價値あるものと感ずるけれども、然かし經驗の示す如く、この價値の感は時々人を惑はすものである。眞面目で熱心な人々でも誤謬に陷つたり又は彼等の間に感想の相違があつたりするのは、餘り價値の念に支配され易いからである。常識は勿論、物理學的又は形而上學的又は哲學上道德上宗敎上の思想は、大抵價値あると想はるゝ或直覺を土臺とし其直覺は別に批評を加へずして恰かも紙幣の如くに通用して居るものが多い。然かし

如何に價値ありと感ぜられ又は想はるゝ直覺であつても、唯その感想だけでは未だ確實とは言へないので、其直覺がよく理性の原則に合ひ、又客觀世界の實際的經驗に合はなければならぬ、この二條件の下に幾度となく幾百年となく試驗されて始めて其直覺の價値が充分に確められるゝのである。過去幾千年間澤山の直覺が試驗されつゝ價値なきものとして棄てられたものも少なからぬ、即ち其棄てられたものは敎育のある人廣い經驗のある人の間に最早意味を失うたものである、其が意味を失うた主もなる理由は、たゞ不規律な情的活動に由て起り、理性に於いて又客觀的經驗に於いて確實な基礎を有たないからである。

(ハ)部分的規範科學が現はす所の多くの規範は、其種類に應じて性質を異にし權能を異にする。普通數字に於ける規範の權能は必然的絶對的である、二と二と合すれば四となるとか二から二を減ずれば零になるといふ事を疑ふことは不可能である。然るに高等數學に於ける規範になる

(ハ)諸ろの規範は性質及び權能を異にす

と、必然的絶對的ではあるが隨分之を研究した上で了解せらるゝのである（數學的の敎育を隨分受けなければ其理を了解せず其眞理も認識せられない。例へば甲乙の二球があるとするに、其面積又は容積の比例は數學を學ばない人には分らぬが、學んで見れば、面積の比例は直徑の自乘に依て分り、容積の比例は直徑の三乘に依て分る。$(A+B)^2=A^2+2AB+B^2$ といふ式は、代數を學んだことのない人には意味は分らず、其が果して眞理であるや否やも分らぬが、學んで見ればよく分る。曾に、分るといふに止らず此外には考へられない、則ち必然絶對の規範である）。

斯樣に數學上の論理的規範が必然的絶對的なものであるといふ事は、論理學上の理想となつて來て、學者等は凡ての論理學を數學的にしやうと試むるやうになつた。のみならず、形而上學倫理學又は宗敎上の規範を數學の規範の如く必然的絶對的にして何人をも之に服從せしむるやうにしやうと試むる者さへあつた。一寸考へると如何にも御尤と思はれるが、然かし其が不可能であるといふ事は實驗がよく證明したのである。蓋は此等諸學の規範が其々異なつて居つて凡てが數學的の規範でないからである。よし其が可能であるにしても、其では本當の意味に於ける道德的生活は出來ないやうになるから不都合であるといふ事を近來感じて

來た。若し道德上又は宗敎上の規範が數學的に立てられるものであるなら、道德上の行爲又は宗敎上の感情は全く必然的であるから、道德も宗敎も直ちに無くなつて仕舞ふ。必然的になつては善でもなく惡でもない。其は恰も月輪の誤らざる廻轉に是非の判斷を下すことが出來ないのと同樣である。

斯樣な譯で、種々の規範は其權能の性質を異にする。論理學又は認識論に於ける規範の權能は、高等數學の規範の權能に隨分似た所があるが、前者の權能を識得することは後者の其よりも寧ろ深い研究と識見とを要する。（論理學又は認識論の專門家の深淵なる思想を了解するには、實に精微な思想力識別力を養成せねばならぬ。勿論之がためには高等敎育を受くる必要があるが、或人には比較的にこの敎育に適するけれども幾ら敎育しても深い所まで行く事の出來ない人もあるやうである）。美學上の規範の權能は全く別種のもので、數學上の其とは非常に違つて居るから、同じ種類とは滅多に考へない（音樂に達した人は、不調和な音樂を聞くことを非常に苦しがる。其は其れが其人の心を支配して居る音樂的規範に反するからである。然かし上手な合奏隊の調和した音樂を非常に愉快に感ずるのは、同じ規範に合致するからである）。道德上の規範の權能は又別種のもの

のである。之は數學的でもなく美學的でもない、從つて理性的判斷若くば美的判斷に依るよりも、寧ろ人に對する情的及び意的態度の判斷に依るものである。道德上に於いては利己主義と利他主義との區別が明かであつて、少し道德上の訓育を受けた人であれば、利他的行爲を命令する良心の聲を聞き分けて行爲上の規範と權能とを識る、而かも又其に從ふことも悖ふことも出來るといふ事を識つて居る。こゝが數學上の規範と違ふ所で、其が當に行ふべき規範とは認識しながら私心的な意志を以て之に反する事が出來る。理性が意志に對して歩むべき道を示すと共に、之を必然的機械的に强ふることはない。必然的機械的でないから是非善惡の別が生ずる譯である。數學上の規範は之を了解した以上は必然的に從はねばならぬ、必然的であるから之を善とは言はないのである。故に、道德上の規範の規範たる所は、之が數學的若くは論理學的の規範と異なる點に在る。我々は數學上論理學上の原則を信じ且つ之に從ふ事によつ

て德行者になることは出來ないのであつて、斯く信じ從ふは餘儀なき事である。若し數學と同じ意味で人が善であるならば惡となり得ることは不可能である。是非善惡の差別は畢竟意志の自由の働きに由ると謂はねばならぬ。

(ニ)善の性質及び起源

(ニ)茲に我々が道德上善の性質は如何なるものであるか又善は如何にして起るかを了解する機緣が存するのである。我々が善人になるのは、理性と德性(良心)とが指示する所の規範を我有として撰擇し實行する意志の働きに由る。我々が惡人になるのは其倒まであつて、其規範を指示されながら之に從はず其規範に背くと知りながら之を行ふ意志的働きに由る。

(ホ)品性の進退

(ホ)此等の考察に由て、人間の品性は斷へず進歩しつゝあるか或は退歩しつゝあるかで分かる。

(ヘ)品性の優劣

(ヘ)人は其性質から見れば善(若くは惡)であつて性質上の差はないが、其性質の分量上種々の程度がある。品性上の富の多少は識つて居る所の規範の數量に由り又其規範を意識的に採用する程度に由る。勿論、道德的感念又は識見の鋭鈍深淺にも由るのであつて、永く引續いて道德上の訓練をなした結果、鋭敏な良心と深遠な道念とを有し且つ之を行爲の上に實現するならば、實に立派な道德的人物となる。然かし如何に道德上の識見が深くても、精神が惡しくあるならば善なる品性を有つことは出來ない。

(ト)品性上の敎育は規範の認識に必要である

(ト)此故に品性上の敎育は規範の種類又は規範の價値を認識する事に就いて甚だ必要である。其敎育の程度に由て、認識する規範の數も種類も隨分違ふ。人に由り時代に由り文明の程度に由りて規範が違ふ所以はこゝに存し、之が爲に倫理學に於いては勿論、形而上學又は宗敎に於いても又は美學や論理學の如きものに於いても隨分規範の差異がある所以である(第七節の乙參照)。

(チ)規範の認識と

(チ)我々が人間の長い經驗を通して價値ありと證明された所の規範を感

尊重とは人格を上進す

受し尊重するのは、自己の人格の發達に依るとすれば、我々が之を感受し尊重しない事は其規範の存在しない證據にはならないので、唯だ自己の人格の發達が不充分であることの證據となるのみ。それで我々は、出來得る丈自己養成に努力して高尚なる規範を認識し之に從つて生活せむことを求むるのである。例へば、相當の教育を受けた人は、更らに進んで數學上、論理學上、哲學上、音樂上、工藝學上、文學上など種々なる修養を試み、之に依て生活を豐富にし興味を深くする。斯のやうに規範を認識し之を愛重すればするほど人格が上進する。

（リ）規範と人の認識の進さに取上るて必要な事は適當な生活法である

（リ）斯くの如く高尚なる規範と其權能とを認識する事と、之に依て我が人格の發達上進をはかるに就いて、最も大切な一事は適當な生活法である。音樂を充分に味ふには、たゞ音樂の書物を讀み理論を知るのみでは出來ないのであつて、實際の音樂者的生活法を要し、數學上の趣味を充分に得るには數學者的生活法を要し、美術を充分に味へるには美術家的生活法を要す、道德上又は宗教上の高尚深玄なる眞理を味へるのも又同樣である。

（ヌ）議論の齟齬は規範の認識の相異に基く

（ヌ）右の話から考へて見ると、或る一つの學問に就いて見解を異にする人共が相互に鬪はす所の議論の多くは、双方的に當つて居ないことが分かる。双方の心を無意識的に支配して居る所の規範即ち公準（ポスチユレート）が相違して居るから、双方の議論の角は丁度喰ひ合はないで相互に空を衝くばかりである。寧ろ討論を止めてモット善く研究するが必要である。自他の心を支配しつゝある規範を善く識別し得るだけの教育を受くる事が何よりの急務であつて、善く之を識別すれば相互を輕蔑し若くは排斥することはなくして、却て相互の眞理を尊重するやうになるに相違ないと思ふ。

（ル）直覺的規範の起源とその權威ある理由

（ル）コヽに殘つて居る一つの問題は、前々に述べた直覺的規範の起源とその權威ある理由の問題である。唯これに價値があると感ずるのみでは充分の滿足が出來ないので、其價値ある所以を知りたく欲ふのである。勿

論實用主義（プラグマチズム）の如くその結果によつて之が價値ある規範であると認識せられるけれども、之は後段の認識であつて前段の認識ではない、規範をして規範たらしむる所以はたゞ規範を實行して見た後の認識に據るのではないのであつて、本來の性質上權能があると認識せねばならぬ。或人（殊に不可識論者）がいふに、規範をして規範たらしむる本來の性質に就いては我々は少しも問ふことは出來ない、唯其が起るがまゝ其が有るがまゝに採用し、出來るだけ之を試用した後の結果に據つて判斷するの外はない、規範の起源までも探り行かうとするのは經驗の外に超出するのだから、空想を掴み果ては迷妄の泥池に陷らなければならぬと。或人は之に反して、規範の起源や規範の權能の理由を尋ぬるは經驗外に超出するのだからと言つて全く之を否定するのは、經驗の内にある大切な要素を見落して居るのである、蓋し經驗の内には統一の要素がある、此要素を我々が充分に認識せねばならぬ、諸ての科學――叙述的解釋的應用的規範的の何れの科學と雖も、人間經驗の或部分を引離して研究するものであり、從つて經驗の全體を識りその統一を觀るものではない。凡て部分的のものは全體的統一的のものに委かさねばならぬ重要な問題がある。故に部分的科學の結果を總合し統一せねばならぬ、而してその總合的統一的の見地から各部分の關係を明かにせねばならない。之を爲して始めて規範の本源を知り、且つ其規範の權能ある所以を知る。斯かる總合的統一的の務めを幾百年か試みた科學は即ち神學である。いざこれから題を變へて、神學の性質に就き又神學と部分的科學との關係に就いて少しく述べやう。

第九節　宇宙に關する總合的科學（則ち組織神學）

（一）一般に就いて神學は凡ての科學に關係す

（一）一般に就いて

神學は部分的思想を總合し一つの全體としての宇宙觀を立てる科學である。故に此科學はあらゆる科學に關係するものであるが、特別に宗教

殊に宗教に關係する

と關係する。何となれば、凡て高等な宗教は宇宙に對する人の全心的態度を定めるものであるからである。

人は何か形而上的の觀念を有つ

形而上學者が證明する如く、何かの形而上的觀念を有たない人は滅多にない。此觀念は大いなる支配力を有つて居るにも拘はらず、大多數の人は此觀念を有することを自識しないが、然かし自識しないだけ其れだけ多く其支配を受けて居る譯であり、從つて其れだけ其支配は强制的な譯である。殆んど凡ての人は、批評的問題が起つて當惑するまでは何かの宇宙觀に依て己が生活の大體を決する、さうして大抵の人はこの宇宙觀を宗教から得る。

宗教の特質

此點から宗教の性質が略ぼ分かる譯で、全體として宇宙の本質に關する觀念と其に對する全體的反應が即ち宗教の特質である。それで此特質の中には一つの全體としての宇宙と一つの全體としての人間との二要素があることが分かる。

未開時代の觀念と

未開時代の觀念は幼稚素朴であつて、何でも思想がポツト頭上に浮んで來ると、別に考察批判を爲さずして其まゝ可しとし、其思想に應じて行動するが、經驗が增し知識が進み思想が豐かになつて來るに從つて考察批判を加へて行爲を決定するやうになる。斯くして宇宙觀も進步し、從つて宇宙に對する心的反應も高尙になつて來る。

開化時代の觀念

宗教進化の跡形を調べて見るに、最初は頗る幼稚なものであつたが、在來の宇宙觀が經驗に合はないことを覺つて來ると、多くは懷疑心が起り、其が極端に走ると無宗教になる、然しヨリ滿足な見解が起れば又其に應じて宗教的情感が動き、從つて宗教的行爲を現はす。其が又思想の發達につれて不滿足になると、新たな見解を生じて其れ相應の宗教心が働くといふ風で、恰かも時計の錘の樣にアチラコチラに搖れ動きつゝ、宗教の形式も內容も段々と進化する。

宗教の進化

神學の職務

一時代に行はれた宗教に伴ふ神學は、其時代に於いて價値があると思はるゝ思想を聚合して、一つの調和した宇宙觀を構成し、其に依て宗教の基礎を据ゑ宗教の永續を圖る。の

みならず、或は宗教に對する人の誤解を辯解し、或は人に對して宗教的宇宙觀を推奬し、或はその宇宙觀に對する感情若くは行爲に就いて教示する。が然し、經驗及び經驗に就いての思想（殊に科學的哲學的の思想）が總合的になり批評的になるに從うて、神學の任務が益々困難になつて來るのは自然の勢である。第二十世紀の今日になつては新知識が澤山出來た爲に、神學はその任務を完ふすることが出來ないと感ずる人は少ない事はない。

この職務は段々困難になる

中には啻に神學のみならず宗教をも否定し、神學や宗教の助けを借らずして滿足な生活をしやうと試みつゝある人もある。この無宗教若くは無神主義も矢張り宇宙に對する一種の態度であつて、宇宙に對する感情及び意志の反應は之によつて定まるのであるが、其反應は個人と社會とに如何なる結果を現はすか、歴史は之が證人である。即ち無宗教主義又は無神主義は、堅固にして豐富な道德性を養成しない。宗教の勢力が衰へるほど道德的勢力は衰へ、凡ての規範の權能も價値も輕くなり終には否

無宗教無神主義の結果

定されて仕舞ふ。尙又理性に對する信用も薄らいで來て科學の基礎も打崩される。無宗教的精神若くは論說が大多數の國民を支配すると、個人に於ても社會に於ても由々しき禍害を釀し、終に恐るべき動亂を起す。斯かる結果を見て或は驚き或は悲み或は不滿を感じて宗教を要求するのは結構な事であるが、至誠にして有爲な人物を俟たなければ宗教振興の大業は覺束ない。

進步的組織神學の特色

近代の進步的な組織神學は、近代の最も正確な批評的科學的及哲學的方法に依り諸科學の結果を總合して、出來得るだけ完全圓滿なる宇宙觀人生觀を構成し、人々を唯物的懷疑的の淵より引上げ、最も健全に進步した學問の光に照らして理想上及び現實生活上の富を增殖し、且つ處世上の勇氣と希望と喜樂と平安とを與へて成効勝利の生涯を送らしむる事を務める。佛教や印度教やマホメット教に斯かる進步的神學があるや否や私は知らぬが、然し東洋諸國に在る幾千萬若くは幾億萬の宗教者の爲

に斯かる進歩的神學を起さねばならぬと思ふ。第二十世紀の進歩的福音的新敎の組織神學は、現に斯の神學を建設しつゝ而して成効しつゝあると私は信ずる。この組織神學は、私が本講演に於いて概略述べた所の諸科學―即ち叙述的、解釋的、歷史的、應用的、規範的の諸科學を以て構成しつゝある積りであり、是等諸方面から來る光に照らして、舊來の神觀、人觀、宇宙觀、及び相互の關係を是正せむと試みつゝある。

(二)　近代の進歩的組織神學の特質に就いて

第二十世紀の組織神學は、舊來の宗敎又は現在の凡ての哲學と同樣に、眼に見ゆる現象と見えない實在との區別を立て、人間に取つて本當の意義あるもの宇宙の根柢たる者は前者にあらずして後者にありとし、之を稱して究極者又は神（ゴッド）といふ。而して近代の進歩した形而上學や論理學や認識論や美學や倫理學や宗敎學などの要求に從ひ、その神は現象世界を離れて存在するものと考へずして凡ての物と其物の過程の裡に內在するもの否な凡ての物と過程とは神の內に在ると考へる、即ち現象を神の發現と觀る。斯ういふ風で、第二十世紀の神學は文明の學問に矛盾しない合理的基礎を設け置くのである。不可知論者や唯物論者や實證論者（ポジチビズム）の如く規範の基礎を求むることを空妄とはせずして、寧ろその基礎は神の內に在ると觀、而して凡ての規範を神の性質の發現として觀るのである。又神は人間の經驗全體の基礎であると考へる、のみならず神は人の人格性の究極的根據であつて、この人格性の統一作用に由て諸々の規範が意識的に起つて來たと考へる。尙又、物質といひ勢力といひ運動因といひ目的因といひ生命といひ心といふものゝ究極的根據も凡て神に在ると考へ、所謂時間なるもの空間なるものゝ客觀的關係も主觀的形式も神に依て存し神に依て働くものであると考へる、要するに、現象世界の數限りなき事物の存在と作用とは凡て神に根ざすものと觀ずるのである（極微分子の存在と作用に至るまで）。斯くの如く、凡ての事物は神によつて說明するが、神その者

は無限無極にして充分に説明することが出來ない、宇宙に於ける無數の神秘は神に依て了解せらるゝ代りに、神その者は何時までも最大の神秘として遺るのである。

(三)　組織神學の特有の領分に就いて

組織神學は唯諸他の科學の結果を綜合することを以て本領としないので、諸他の科學の有たない獨特の領分がある。之がなければ斯學が人間の幸福に對して特別の貢献をなすとは言へない。

特別の問題

我々が前上に述べた宇宙全體としての觀念を得ると同時に起る問題は、宇宙の究極實在者の目的は如何、性質は如何、經綸は如何、この實在と人間との關係は如何などの問題である。就中神の性質に就いて起る難問題は、神の性を惡とすれば何故現象界に善があるか之に反して神を善とすれば何故惡があるかといふ事である。此の難問題に對する答解は頗る込み入つて居るから、私は此處でそれの解釋を試みる考はないのであるが、一寸私の所信を申して見れば、現世界に害惡(苦痛と罪惡)のある事は勿論神の素志に反するものであるが、是も又何かの道に依て神の眞善にして賢明なる目的を達するに利する所があるに相違ない。之は固より一つの信仰であつて、之が信仰であるといふので多くの人々は之を承認しないけれども、此信仰を保證する丈

害惡の問題

けの根據なきにあらず。此信仰は正當だと思はしむる實驗法があるから、此法を實際に行へば成程と合點が行くであらう。凡て神學上の難問題に對する解釋法は科學上の其と同樣であつて實驗に若くはない、凡ての論説若くは信仰の結局の證明は實驗である。神學上の根本的問題は決して抽象的思索的の議論に依て解せらるべきでなくして、信仰と希望と喜樂と誠實と聖潔と仁愛との充實せる實際生活に依て始めて解せらるべきものである。吾人がいと眞面目に熱心に害惡と奮鬪しこの奮鬪に由て道德的信仰的精神が振起せられ、克己力が發揮せられ、害惡に對する反撥力抵抗力が增進せられ、自力の薄弱なる事を切に感ずると共に神力に信頼する熱心が深くなり、其他思ひ寄らざる眞き結果を見る時に、始めて現世界に害惡の存する所以を實地に解することが出來るであらう。

(四)　神、宗教、及び神學に就ての定義

以上述べた所の立場から、復たび神と宗教と神學との意義に就いて考究することは便利でもあり又必要でもある。

(1)神といふ觀念

(1)神といふ言葉は、宇宙の全體を單一の實在と觀た其觀念を一言で現はしたものである。故に此觀念は人間の最も高大にして且つ最も普汎的なもので、其内容の豐富なること之に優る觀念はない。而かも此觀念は

其內容として個々獨立に存在する諸要素の總計に由て成立つものでなくして、其全體が單一として存在するものである。其單一なる全體の存在に依て內容の諸要素が成立する譯である。

理性の方面からいふと即ち哲學的にいふと、此神觀は萬有の究極的說明を與へ諸ての難問題に對する解釋を施す事になる。如何なる事物の存在若くは過程に就ても、之が直接又は間接に理論的又は情感的に神に依據することを認識するまでは本當に說明し得たとは考へられない。故に神は理性の（從つて哲學の）究極的目標である。

神は理性の究極的目標である

情性の方面からいふと、此神觀は凡ての精神的の富の本源となる、眞善美の凡ての基本は神に在ると感ずる時に始めて眞正の價値あり權能あることを識るのである。神自身は眞善美の本體である、所謂眞善美といふは神の性質を簡單に表現したものであるとすれば、人生の最も深玄で眞實で價値ある快樂は神から出る。我々は此富を念ひ且つ樂み且つ實際

神は情性の究極的目標である

生活の上に實現する爲に神と親密なる關係を結ぶ。之を他の方面からいふと、我々が神と親密なる關係を結び神に似たる性質を發揮する爲に此富を我有とするのである。之を我有とするといふのは、眞善美の原理を握つて、之を我が理性と情性と意性とを總合したる品格の內に入れ込め、之を體現し之を化身する事である。かるが故に神は人間の情性の究極的目標である。

意性の方面からいふと、此神觀は人間凡ての行爲の究極目的を與へる。人生の眞正なる目的は人間に對する神の目的即ち神自身の意志と品格とを個人的及び社會的生活に實現するに在る（此實現のためには人の理性情性意性の三つを働かされねばならぬ）。此實現によつて始めて本當の滿足を得る。蓋し人性は元來神性と一致すべく造られてあり、從つて人の目的は人を造つた神の目的と一致すべき筈であるとすれば、神の目的を實現してこそ始めて本心の滿足が得らるのである。神の品性と目的とを我が品性とし目的とするだけ其れだけ

神は又意性の究極的目標である

神と合一する譯であつて、神と合一するといふ事ほど人生の最大目的はないのである。

(2)宗教

(2)宗教の意義は既に前に述べた所で其大體を得て居るから、茲に多言を用ゐずして極く簡約に言つて置く。高尚なる宗教は神人の意識的合一を意味するのであつて、此の合一のためには人間の理性と情性と意性とを合した人格性全體の動きを要する。結り宗教は前にも言つた通り全體としての宇宙に對する人の全體の態度であるが、此態度が上進するに從つて宗教は益々高尚になる。一言にてこの態度をいへば、神は我が天父にして我は其子なりといふに在る。

(3)神學

(3)神學は總ての科學の結果を總合して最も妥當なる神觀を得むとする者であるから、其特別の任務は合理的批評的に萬有殊に人間に對する神の意志經綸を明かにし且つ神に對する人の正當なる態度を定むるに在る。この妥當なる神觀と正當なる態度とに依て始めて精神上の圓滿なる幸福と滿足とを得るのである。今科學的に神學を定義すれば、神學は一つの全體としての宇宙に關する總合的科學であつて、(一)現象世界に段々顯現せられた究極實在者の性質品格及び目的を研究し、(二)眞善美に關する規範の起源と其調和と其が究極實在者の性格に基く所の權能とを說示し、(三)圓滿完全なる心靈的生活の唯一の目的として、究極實在者それ自身を推薦し、且つ彼れと父子的靈交を爲さむことを勸奬する所のものである。

神學の定義

勿論斯かる定義は啻に基督教の神學にのみ用ゐらるゝものでなく、凡て高尚なる宗教の神學(佛教印度教又は回教の如き)に於いても用ゐらるゝものであるが、然かし他宗教の神學がこの定義を用ゐるならば、其內容は基督教神學の內容と隨分違つて來るであらう。そこで自然に起る問題は、何れの宗教の內容が最も善く人心の要求に滿足を與へ最も善く豐富にして堅固な生活を爲さしむるかである。

(五)　組織神學の部分に就いて

(イ)宗教科學

諸他の科學と同樣に、組織神學にも種々の部分があつて、其々の專門家を要する。(イ)其一は宗教科學である。蓋し組織神學は普通の叙述的宗

教科學が提供する事實をそのまゝに受け、組織神學全體の立場からして凡ての宗教に新たな光明を與へ新たな解釋を施す。(ロ)其二は歴史的神學である。組織神學は近代の學究より得た見地より、宗教思想史の全體を總括すると共に其發達の階段を明かにし從つて神學が段々と進歩しつゝ今日の思想にまで及んだ徑路を明かにせんとする。(ハ)其三は宗教哲學である。組織神學は宗教哲學の結果を受け、經驗全體の立場から得た光に照らして新たな説明をなす。(ニ)有神論（前に言つた有神論といふ言葉は一つの宇宙觀を指す名稱であるが、茲にいふ有神論は一つの神學としての名稱である）の特別の職分は、人間の性質要求及び經驗の立場より又組織神學全體の立場より見て最も適當と思はるゝ神觀を構成するに在る（競爭しつゝある諸ての形而上學的宇宙觀を研究する職分もある）。時として有神論の問題は宗教哲學の内に包容されて居ると言はれるが、此論は宗教及び神學に取つて甚だ大切であるから獨立な地位を與へることは當然と思ふ、又實際に於いて此論を專門的に研究する學者は少なからぬ。(ホ)積極的建設的神學の職分は、宗教

(ロ)歴史的神學

(ハ)宗教哲學

(ニ)有神論

(ホ)積極的建設的神學

の要素となつて居る確信を組織的に叙述し批判し調和し統一するに在るのであつて、此は組織神學の中心ともいふべき部分である。(ヘ)倫理學を組織神學の立場から研究すると、普通の倫理學と隨分違つて來る。勿論普通の倫理學の結果を受けるのであるが、宇宙全體の見地及び神の性質と意志との見地から道德問題を研究するのである。(ト)辯證論の職分は、組織神學が構成した宇宙觀を攻擊する反對論に對して答辯を與へると共に、其反對論が主張する宇宙觀の缺點を指摘するに在る。

(ヘ)倫理學

(ト)辯證論

(六)　餘　論

(1)神學は一種の規範的な學科であり、而かも最上の規範的科學である。何となれば、斯學は全體としての宇宙の性質と目的とを示し、此に據つて全體としての人間生活の規範を示すからである。

(1)神學は最上の規範的神學である

(2)科學の數は非常に多いから、一人が其全部に通ずるといふことは無論出來ない。そこで或る人々は難じていふに、全部に通ずることの出來

(2)組織神學の構成は不可能である

といふ議論に就いて

ないものを總合するといふ事は撞着した話である、故に組織神學の構成は結局成効覺束なしと謂はねばならぬと。或意味に於いては其通りである、殊に論者が想ふやうに一人で凡ての科學の總合組織をする事が必要であるとするならば誠に其説明の通りである。が然し實際に於いてはさうではない。蓋し組織神學の材料である諸科學の研究に與かつた學者は實に澤山であるが、其等の學者は正直に公平に又巧妙に各自の職責を盡したと我々が信用するならば、彼等が研究した結果を總合し統一することが出來る。私は彼等が大抵應用すべき研究者であることを認め、又彼等が研究して得た所に採用すべきものが少なからぬことを信ずる。故に私が作つた表には缺點もあらうし又誤謬の點もあらうが、少くとも諸科學の總合的大觀に於いて幾分の參考となるであらうと思ふ。若し專門の士が此中の缺點若くは誤謬點を發見して是正を施すならば、段々完全に近いものが出來るであらう。斯くて代々忠實なる學者達の努力を積み重

(3)宇宙に關する總合的研究は不可能であるといふ議論に就いて

ねるに由て、終に滿足な總合的科學即ち組織神學が成立するのである。

(3)或人は、諸ての科學は漸く近代に起つたもので甚だ幼稚であり不完全であるから、宇宙に關する總合的研究は實に覺束ないといふかも知れぬ。誠に御尤もな説であつて、私が作つた表を見ても此事は明白である。叙述的科學でも未だ實に不完全な點があるのだから、況して解釋的科學殊に形而上學が今尙ほ多くの難問に纏はれて居るといふ事は怪しむに足らぬ。併ながら、我々人間の實際生活は科學の完成を待つて居る譯にはゆかないので、餘儀なくも宇宙に就き人生に就き目前の事物に就いて何かの見解を有たざるを得ない、科學的に究極の觀念を得なくとも何かの究極觀を要し、又その究極觀に就いて何かの態度を定めねばならぬ。加之、科學そのものゝ進歩に就いても宇宙全體に對する態度に依て實驗しなければならぬ。之は言はゝ完全なる宇宙觀に達する準備的宇宙觀であつて、之に多少の誤謬があり不完全な點があつても、之が全く無いより

は遙かに優つて居る。且つ夫れ、人間の宗教的要求若くは生活は必ずしも科學や形而上學に依賴しなければならない者ではない。叙述的解釋的諸科學の全體に通じ又其の精細な部分を知らなければ宗教家になれないといふ譯ではないので、直覺的に宇宙及び人生を大觀することが出來る。人間に取つて最も肝要な問題は、宇宙の究竟的實在の性質である、委しくいへば其性質は善か將た惡か理性德性の有るものであるか但しは無い者であるかといふ問題であるが、案外この問題は餘り六づかしいものではない。蓋し結果は原因の說明であり、有形の事實は無形の表象である。若し夫れ一國民が究竟的實在をたゞ物質と觀じ理性も德性もないものと考へるならば、如何なる結果を現すであらうか、恐くは百年を待たずして其國民は理論上の迷宮に入り道德上の深淵に陷り實際生活上の渦中に捲かれて慘憺たる悲況を呈するであらう。多少不可解な點はあつても、究竟的實在者が善であり理性を有し德性を具する者であるといふ事に關する實際的證明は手に取り易い（近來になつては普通科學と雖も此事をよく證明する）而かもこの證明は專門的の精細な研究によつて始めて得るものではないので概觀大觀によつて得られるものである。叙述的解釋的科學の眞正の價値と職分とは、究竟的實在に就いて精細な知識を與へることに在らずして、寧ろ現象世界の共存及びその過程の續起に關する知識を與へ、從つて現象界を支配する力を與へるに在る。究竟的實在者の大體の性質を識ることは實在者が現象的世界に於いてなしつゝある行爲の精細を識ることよりも或意味に於いて仕易い。其は恰も四五歲の子供が、學者である其父が學界に於いてなしつゝある行爲の精細を知ることが出來なくても父の慈愛なる性質を識り易いやうなものである。我々は理性に依つて神の思想を解することが甚だ淺く、現象世界に於ける神の經綸活動を覺ることが誠に少ないけれども彼が智慧と慈愛と正義とに富み給ふ方であるといふ事は比較的に識り易いのである。

(4)宗教の二要素

(4)神及び宗教に關する右の定義が正當であるとすれば、以下に述べる事共は自然に明かである。曰く宗教は神と世界との二要素によつて成立つ所の一つの全體である。即ち宗教の對象物は目に見える世界と(自然界)と見えない世界(超自然界)とに在る。人間に思考力が出來てからこの方、斷えずこの二要素の性質及び相互の關係に就いて正當な觀念を得むとして勉めたのであるが、知力が增し經驗が廣まるに從つて、此の二要素に關する觀念は段々進化しつゝ實に永い歷史を今日に遺して居る。宗教進化の一方面即ち知的方面は斯くの如くして行はれたが、其が劣等な場合に於いては肉的生活を福ひするために見える世界も見えない世界も利用せむとしたけれども、其が高尙な場合に於いては、靈的生活を進めるために見える世界を利用せむとした。

* * * * * * *

以上數回に亘つて述べた事を以て人間の理性の活動に關して研究する

人間には主觀と客觀との兩性質がある

今は客觀世界へ進み行く出口である

利益に就いての話は一先づ終つたとして、偖て全體に關して概觀すると人間の性が二元的であるといふ事が明白である。即ち人間は主觀的性質と共に客觀的性質を有するものであつて、理性情性及び意性の凡ての主觀的活動は客觀世界に於ける活動のために存するのであるが、然かしその客觀的活動には主觀的の結果を得るといふ目的が存する。この主觀と客觀との兩極は人間生活の兩面である。この兩面の不斷の交涉作用に由つて人間の生活及び其發達に意味があり價値がある譯である。人は思考力即ち主觀的活動を以て行爲即ち客觀的活動の動機を造り、外部の境遇に適應する能力を得、自己を發揮し擴張して有效の生活をなす事が出來るのである。斯くの如くして、外部に發現する行動は復び內部の精神を刺戟し興奮して、更に又外部に對する增大の能力を作るのである。

御互にこれまで研究して來た所の諸科學は、凡て主觀的のものであるが、今は丁度客觀世界の方へ向つて行く出口に來たのである。

章末の表に於いて、右の方に赤色の縁の代りに黄色の縁が設けてあり、そして其矢印を内へ向けずして外へ向けてあるのは、心理作用の新しき樣式と方向とを示すものである。是迄に述べた所の批評的思想は、成るだけ諸ての感情の要素を排除し唯理性の働きに據つたのであるが、

表中白色の部分

表中白色の部分は、その主觀的心理作用を示すものである。規範的科學と雖も、其が批評的思想である間は矢張り理性の働きであつて感情や意志に訴へない。所で、規範的科學が理性の働きを終ると、感情と意志とに訴へる。黄色の縁は即ち此事を表示す。而して今度起つて來る所の心理作用は、内から起つて外へ向つて働く。即ち人間の内なる主觀的生活は客觀的行爲となつて外に現はれ、之に由て客觀の實際世界が變化し來り、之に由て人間活動の所産なる客觀的文明が起る。

表中黄色の縁の主觀的生活が客觀的生活となる

第十節　客觀的文明

客觀的活動の三種の現象

人間の主觀的活動に於けるが如く、客觀的活動に於いても三種の現象に基いて區別するが便利である。

(一)死物界に於ける現象

(一)人間は自己の思想に據て死物界に種々の變化を引起す。之に據て境遇を變化し、自己の意志目的に服從せしめて、福利を增進する。物理的境遇を支配し其勢力を使用して、益々自然界の主たる地位を得る。例へば火、風、蒸氣力、電氣力などを使用して我有とする。種々の器具、機械、金錢、衣服、家屋、交通、運輸などの事も此の範圍に屬する。

(二)生物界に於ける現象

(二)生物界に關する知識の增進するに依て、動植物を人爲的に進化させ、その性質を改良しその種類を增殖する、從つて人間の食物の量も質も段々善くなり、諸ての方面に於ける生活の程度が追々高くなる。また其知識に依て、病氣の本なる微菌征服の術が巧みになり、健康を增し壽命を加ふるに至る。或は其知識に依て生殖上の原則を知り、人類を生物學の方面から進歩させるやうになる。

(三)精神界に於ける現象

(三)然かし人間文明の特色たる點は、その物質的生活に在るよりも寧ろその心靈的生活に在る、時代の進歩と共に現象世界に關する知識も進歩し、けなげにも此世界の主たらむとの大希望を起して來る。この進取的精神は、死物界及び生物界を了解し且つ支配する事に於いて現はれるが、

殊に好く現はれるのは精神界に於いてゞある。即ち人間の社會的生活、言語、制度、文學、美術、自然科學、哲學、道德、宗敎などに於いて好く現はれるのであつて、此處に思想若くは理想の斷えざる進歩發展がある。その思想若くは理想が客觀的に諸文明の要素となつて現はれると、其が又直ちに人間の心理性に新らしい刺戟を與へ、新らしい心理作用が起つて新らしい批評的思想を生む。そこで新らしい理想が出來、新らしい創造力が働らき、從つて又器械や制度や文學や哲學や道德や宗敎などの上に新らしい進歩を現はす。

今日に於ては自然界の刺激よりも人間界の刺激が大多數である

今日になつては、人間の思想若くは理想を惹起し創造的意志を活動せしむる大多數の刺激は、自然界よりも寧ろ人間自身の文明的産物より來る。今日の人間は畢竟文明の産兒である。赤子をして大人たらしむるものは、多くは其育つる所の社會（殊に育つる所の家庭、親の感化）其習ふ所の言語、其讀む所の書物、其見る所の美術、其敎へらるゝ所の科學哲學、また其實行する所の道德宗敎などに依る。今日の人間は決して自然の産兒ではなくして、人間の創造力に依て生立つ所のものである。普通の思想家が考へるよりも案外に人間は自己の働きの産物である、言はゞ人間は己を造るものである。自然界が與へる所のものは始んどたゞ無撰別の原料（遺傳性を通して生るゝ所の赤子）に過ぎないので、人間自身は其後の萬事萬端を引受けて一人前の人間として仕上げるのである。人間のこの創造的撰別的事業の價値を多少知るために、生れたまゝの赤子を犬羊の仲間に置いて大人にまで成長させたと假定して見れば、言語もなく美術もなく道德もなく宗敎もなく、自然界を識り又之を解し又之を支配する能力もない者になるであらうが、斯かる者を人間だといつた所で果して如何なる心を有つ人間であらうか、殆んど禽獸に類した者であるに相違なからう。

* * * * * * *

近代學者の注意を惹いて居る科學の中、人類の發展史――即ち人類の劣等狀態から種々な階

史は最も近代學者の注意を惹いて居るものである

段を經て今日の狀態にまで發展して來た事實と其原則とを研究する學科は、恐らくは其の最た るものであらう。本書第一章の中に極雜つと述べたやうな、人類進歩の階段道行を研究する學科ほど興味を感じて居るものは恐らくはあるまい。然かも、人類發展史上の問題は頗る廣大複雜なもので、その年月は非常に永くその人種は非常に多いから、該問題の諸方面に亘つて完全な知識を有する學者は殆んどあるまい。人類發展史の大體だけでも、一書の中に網羅して居る書物があるかないか私は未だ知らぬ。此處に私が言ふ所は、たゞ人間が產出した客觀的文明に關する講話の結びとして、少しく其特色と思はるゝ數點を指示するに過ぎないのである。

以下少しく客觀的文明の特色に就いて述べやう

或意味に於いて、人間の客觀的生活はたゞ主觀的生活の永い試驗であると言つて宜しい。蓋し、人間は心の所產である觀念思想の眞否眞否を明確にせむために、幾千年間の試驗をやつて來た。一例を擧ぐれば、何れの人種に屬する人間も全く獨立な個人的生活をするものではなくして常に團體的生活をするものであるが、此團體を組織するに就いては種々の方法があつて、人間は最初から其方法に關して色々試驗して居る、これ則ち社會の政治的方面に關する實驗である。近頃までの學者は、初代人間の團體組織は族長政治(ペトリアーキー)であるとしたが、最近の說によれば、其以前に女主政治(メートリアーキー)があつたといふ。其然否は暫らく措き、兎に角團體が段々廣大になるに從ひ、生活問題の必要からして族長政治の不都合を感じ、種々の政治法——例へば、君主政治(モナーキー)、專制政治(デスポティズム)、寡頭政治(オリガーキー)、貴族政治(アリストクラシー)、民主政體(デモクラシー)、立憲政體(コンスチチューショナリズム)などを發明した。

人間の客觀的生活は主觀的生活の永い試驗である

政治に關する試驗

男女の關係問題に就いても、初代から樣々の經驗をした、例へば、一夫多妻(ポリガミー)、一妻多夫(ポリアンドリー)、蓄妾(コンキュビネージ)、プロスチチューション、プロミスキユーチー、賣婚、雜婚、一夫一婦などの方法である。また物件所有法に就いても種々の經驗をして其眞否を試驗して來た、最初には共有法であつたが、後代には私有法になつて文明諸國に於いては此法が非常に盛んになつた、其れが又文明の發達と共に段々不都合な點が現はれて來るので復た元の共有法に立戻らむとする傾向が生じ、今や兩法の間に激甚なる衝突が起つて居る。其他、生活法又は生產法に就いても、人間は非常に永い歷史を經て來た。最初には野生の果物や野菜や又は魚類を取つて生活して居つたのが、狩獵や魚漁の法を發明し、尙ほ後代になつては鳥獸の飼養法を知り、更に進んでは穀物野菜又は果物を作る法を知つて、段々と新しい生活法を取るやうになつた。殊に近代は器械の發達と專門的知識の增進とに依つて、種々の物品を駛速に又巧妙に製出するやうになり、從つて工業制度が大いに進歩して來たが、之が社會の狀態に影響を及ぼすことは實に非常なものである。而かも此等の生活法は、一方からいへば人間が幾百幾千年の間試驗し來つた科學的實驗の結果である。

男女の關係に關する試驗

物件所有法に關する試驗

生活法又は生產法に關する試驗

事業法の發達又は社會の組織の變遷につれて、勞働者の性質若しくは地位は種々樣々に變化したが、之に就いても人間は永い間の試驗を經て來たのである。太古代に於いては、男子は外に出でゝ戰鬪漁獵の事に從ひ、女子は內に在つて育兒製作農事に從うたのであるが、或程度まで進んで來た時には、勞働を賤しいものと考へて凡て婦人と奴隸とにさせるやうになつた。男尊女卑奴隸賣買の習慣はこゝに起つたのであるが、段々その不都合を感じて來て、之が改良を圖るやうになつた、其後勞働者は一方から見て自由の身となつたが、比較的僅少の賃錢で雇はれて來るので復た元の共有法に立戻らむとする傾向が生じ、今や兩法の間に激甚なる衝突が起つて居る。其他、生活法又は生產法に就いても、人間は非常に永い歷史を經て來た。最初には野生の果物や野菜や又は魚類を取つて生活して居つたのが、狩獵や魚漁の法を發明し、尙ほ後代になつては鳥獸の飼養法を知り、更に進んでは穀物野菜又は果物を作る法を知つて、段々と新しい生活法を取るやうになつた。殊に近代は器械の發達と專門的知識の增進とに依つて、種々の物品を駛速に又巧妙に製出するやうになり、從つて工業制度が大いに進歩して來たが、之が社會の狀態に影響を及ぼすことは實に非常なものである。而かも此等の生活法は、一方からいへば人間が幾百幾千年の間試驗し來つた科學的實驗の結果である。

事業法の發達又は社會の組織の變遷につれて、勞働者の性質若しくは地位は種々樣々に變化したが、之に就いても人間は永い間の試驗を經て來たのである。太古代に於いては、男子は外に出でゝ戰鬪漁獵の事に從ひ、女子は內に在つて育兒製作農事に從うたのであるが、或程度まで進んで來た時には、勞働を賤しいものと考へて凡て婦人と奴隸とにさせるやうになつた。男尊女卑奴隸賣買の習慣はこゝに起つたのであるが、段々その不都合を感じて來て、之が改良を圖るやうになつた、其後勞働者は一方から見て自由の身となつたが、比較的僅少の賃錢で雇はれ

勞働者の性質若しくは地位に關する試驗

れる身分であるから、未だ眞正の自由を得るには至らない。其れが近代になつては、曾に勞働者のみならず政治家も宗教家も道德家も、勞働者の地位に就いて不滿足に感じて、所謂社會改良策を講じ、新式の社會組織を造らむとするやうになつたのである。

其他の試驗

其他、美術、音樂、建築、文學、科學、哲學、道德、宗教などの事に就いても、人間は數千年間の永い試驗をなしつゝ、今や有形上又は無形上、莫大無量の富を蓄積して居る。

人類の進歩は平均一樣のものではない

具眼の歷史家は、過去數千年間に於ける人類の進步を、平均一樣のものとは觀ずして、時としては速く、時としては遲く、時としては退き、時としては停まり、又時としては前に打棄てた所に立戻るやうな事もあつたと觀る。

或思想が數代の人間を支配した

人間生活の歷史に於いて一つの顯著なる事は、或思想が數代の人間を支配する事である。其れが非常な勢力を揮ふ一大思潮となつて、滔々として凡ての制度文物を漂はす。其例は諸方面に見ることであるが、茲にはたゞ宗教上の例を擧げるに止めて置く。

宗教上の例

人間の初代に於いては勿論、其後の時代に於いても、幾百幾千年の永い間引續いて、宗教の眞髓は儀式にあるといふ思想が流行した。其時代に在つては、個人の信仰の性質に就いては何等の注意を拂はず、唯一定の儀式さへ執行すれば足れりとした、而して其儀式を守るのが則ち宗教家の本色であると考へられた。然るに、人心が發達するに從ひ、信仰の個條に重味を置くやうになり、宗教の眞髓は神學に在るといふ思想が流行するやうになつた、其時代に在つては、教理を明かにする事に力を籠め、續りに其教理を人々に推奬するのみならず、之を承認しない者を迫害し、甚だしきに至つては殺戮するやうな事さへあつた、歐羅巴に於いては斯かる思想が數百年間流行したのである。所が又他の時代に於いては、宗教觀が一變して情的になり、儀式も信條も徒らなるものと見做す代りに、神人の情的關係を以て宗教の醇なるものと考ふるやうになつて來た。而して宗教的情感の盛んな時は忽爲として心靈新生の經驗をする事があると考へる、斯の宗教觀に於いて理想とする經驗は則ち神秘である。其時代に於いては、教會の制度儀式が可成その神秘的宗教經驗を喚起さすものであつた事は言ふ迄もない。是等の宗教觀の外、宗教は天佑に依つて此世を幸福に送る方法であるといふ觀念が、隨分永く行はれたが、其後、宗教は現世の幸福の爲でなくて來世の幸福の爲であるといふ觀念に移り、未來の幸福を得るために難行苦業を厭はず何物を犧牲にすることをも惜まないやうな風習が行はれた。

今や新しい宗教觀が起りつゝある

然るに今日となつては、是等の局部的な宗教觀は凡て宗教の性質を誤解して居るものと見る。永い歲月の間これらの宗教觀を實驗した結果、その不完全なことが分つて、今は一つの新しい宗教觀が起りつゝ、其れが全世界の人心を動かさむとして居る。其の新觀念の中心原理は過去に於ける宗教の內に潛在して居つたものであるが、今は其れが陽はに出現

眞正の宗教は人生の總ての方面に關するものでなければならぬ

して、宛かも出潮の動くが如く、世界の人心は其潮流に捲き込められむとする勢を呈して居る。

蓋し、數千年間に於ける宗教上の實驗に據つて、眞に宗教といふべき宗教は、啻に合理的又情感的ばかりでなくして道德的のものでなければならず（眞と美とは宗教に取て大切な要素であるが、善は尙更ら大切である。其善を得るは眞者くは美を得るよりも六づかしいが、六づかしいだけ其だけ大切なのである）又人生の總ての方面に關係するものでなければならぬといふ事が解つた。宗教は決して人生の或る一局部にのみ關はるものではなくして全體に關はるものである、眞正の宗教は人間の性質の全體に由つて起るものであり、人間の境遇の全體に對する態度を定むるものである。故に今日の進歩した宗教家は、知情意の働きを總合した所の全心全靈を以て、宇宙全體に對する態度を定め關係を結ばむとする。舊來の宗教が不完全であつた譯は、主もに人性の或る局部のみを基礎とし又境遇の或る部分のみに關係したものであつたからである。其れが今日となつては、最早斯かる

正當なる神觀及び神に對する態度

局部的の宗教觀を維持することが出來ないやうになつた。

今日の宗教家が崇拜の對象とする神は、萬有若くは人間を離れて存在し給ふものではない。神が果して有るならば、必ずこの世界全體に在し給ふ、萬物の內——その極微分子の內にも——に在し給ふ。宇宙萬有より隔離超絕する者として彼を拜するは、彼の恩寵を受くるに相應しき態度ではない、却つて宇宙萬有に內在し給ふ者、殊に人間に親近なる者として彼を拜するが、彼れの聖意に適ふ。神は自然界に顯現し、殊に人類界に顯現し給ふ故に、この兩界に於ける顯現を無視しては、何處にも神を見出すことは出來ず、又神の恩寵を受くるの道がない。神を敬愛せんと欲せば人を敬愛せねばならぬ。而して、神が人を愛し給ふ如く、一切報酬を受くる念を離れ無條件に人を愛する事によつて、始めて神と同心になり、神に似た者になり、從つて眞に神を識る者になるのである。

神を敬愛せんと欲せば人を敬愛せねばならぬ

又、眞正の宗教は舊來の宗教の觀念若しくは儀式に於ける一大缺點は、餘り道德に重き

道德的でなければならぬ

を置かなかつた事である。宗教信者になるには強ち道德的に善良な人間にならなくともよいやうに考へたが、今日に於いては斯かる觀念は宗教の性質として甚だ不完全である事が解り、從つて永く之を維持することが出來ない事が明かになつた。現今の文明國民の大多數は、宗教と道德とは兩輪兩翼の關係があるもので決して分離することは出來ないと考へ、宗教なき道德も道德なき宗教も共に淺弱にして取るに足らぬものであると思うて居る。舊來の儀式的教義的感情的現金的後生的の宗教は、餘り道德的のものでなく、却つて道德を無視して居るが、今日起りつゝある宗教は、進めば進むほど個人も社會も道德的に向上させるものである。今後この宗教が、高尚なる人物を多く產出し又社會を良化する實蹟を擧げたならば、始めて此宗教の完全なることが證明せらるゝであらう。但しこの倫理的宗教は、一個人の性質全體を其境遇の全體に關係させ、殊にその人種的境遇に關係さするものである。『若し人が其兄弟(凡ての人)を愛せ

宗教と道德との關係

神に事ふる道は人に事ふるに在り

すしていかで神を愛することが出來やうか』、神を拜し神に事ふる道の根本的要件は、同胞兄弟に奉仕することである。この要件を缺いた信神は到底不具たるを免かれない。

この新宗教觀は將來に於いて一大新文明を起すであらう

右申述べたやうな、近時の宗教界の潮流に關する私の卑見が誤らなければ、此の新潮流は、偉大なる感化力を社會の全般に及ぼし、人の思想及び生活を改善して、一大新文明を起すに至るであらうと想はれる。勿論、斯くの如くなるには、世界多數の人士がこの潮流を歡迎し、之を以て己が理想とし、己が實際生活上の主義とし、凡ての行爲の動機とする必要がある。蓋し、文明の進步は自然の所產ではなくして、人間努力の結果である。

第十一章　回顧と結尾

諸科學の性質及び關係の講演を始めてから茲に殆んど半歲、我ながら不滿に思はるゝ節も數々であるが、略ぼ目當ての峯の頂きにまで來たやうだから、暫らくこゝに足を止めて、過ぎ越し跡を回顧しつゝ拙なき論を結ばうと思ふのである。

第一章の概觀

私は第一章に於いて、社會に相當の地位を有する人は、社會に對する自己の位置と責任とを明確に自識し、且つ其實力を持つために、普汎的知識を得なければならぬといふ事を概論し。先づ人類發展の道行を略述し。分業の發達專門の增加につれて、複雜なる文明が起つた次第を通觀し。終りに普汎的知識を得るの方法として知識分類の必要を主張したのであつた。

第二章より第九章までの問題

第二章と第三章とに於いては、科學と哲學との歷史、意義、性質、範圍、職分、及び用法に就いて論じ、尙ほ兩學の關係に關する種々の見解を擧げ。第四章に於いては、諸科學分類の歷史を學び、その分類法の益々發達して複雜精密になつた次第を示した。それから第五章に入つて、宗教の性質、意義、心理的作用、又は宗教に對する學者の態度などに就いて述べ。第六章に於いては、神學の性質に就き、神學と宗教若しくは科學若しくは哲學との關係に就いて研究し。第七章に於いて、科學と哲學と宗教との衝突及び調和の問題を論じ。美學と倫理學とに就いて第八章と第九章とを用ゐたのである。

第十章の主意

斯くて、人生の最も主なる興味に就いて大體の識見を得て、吾輩が最後の目的とする『諸科學の性質及び關係』の準備が略ぼ出來たから、第十章に入つては、是迄に研究して來た諸要素を一と纏めにして、之を一表の內に包括し、而して簡短に之を說明したのである。即ち先づ、客觀世界と其世界からの刺戟に由つて起る主觀世界とを區別し。更に、後者の中に客觀の實物に對する指示を有するものと有せざるものとの二種類があることを示し。それから、所謂客觀的の觀念を五種類（又は五階段）に分け、この五種類は所謂主觀的の觀念を通じて始めて有効なるものであることを論じ。更に進んで、その所謂主觀的の觀念を三大種類即ち、叙述的のものと解釋的のものと規範的のものとに分けて、各種類の特質と主もなる內容と其中の種々なる學科の名稱及び其材料とを列擧した。而して最後には、人間の主觀的生活に由つて起る客觀的生活に就いて略述し、客觀的文明の三種若しくは三階段の現象を說示し、斯くて外界は內界に感化を及ぼし、其感化力が內に活動して更に外界に感化を反及し、內外相援し相應じて益々廣く高く深く且つ大いなる文明を產出するといふ次第を概觀したのであつた。

諸君は定めし私と御同感であらうと想ふが、これ迄御互に研究し來つた事に據つて、我々人間は實に珍らしい生物である事が分かり、人生の

幾千年間に亘りて人間の建つる立しつゝある文明の宮殿

この宮殿は唯學者の專有すべきものではない

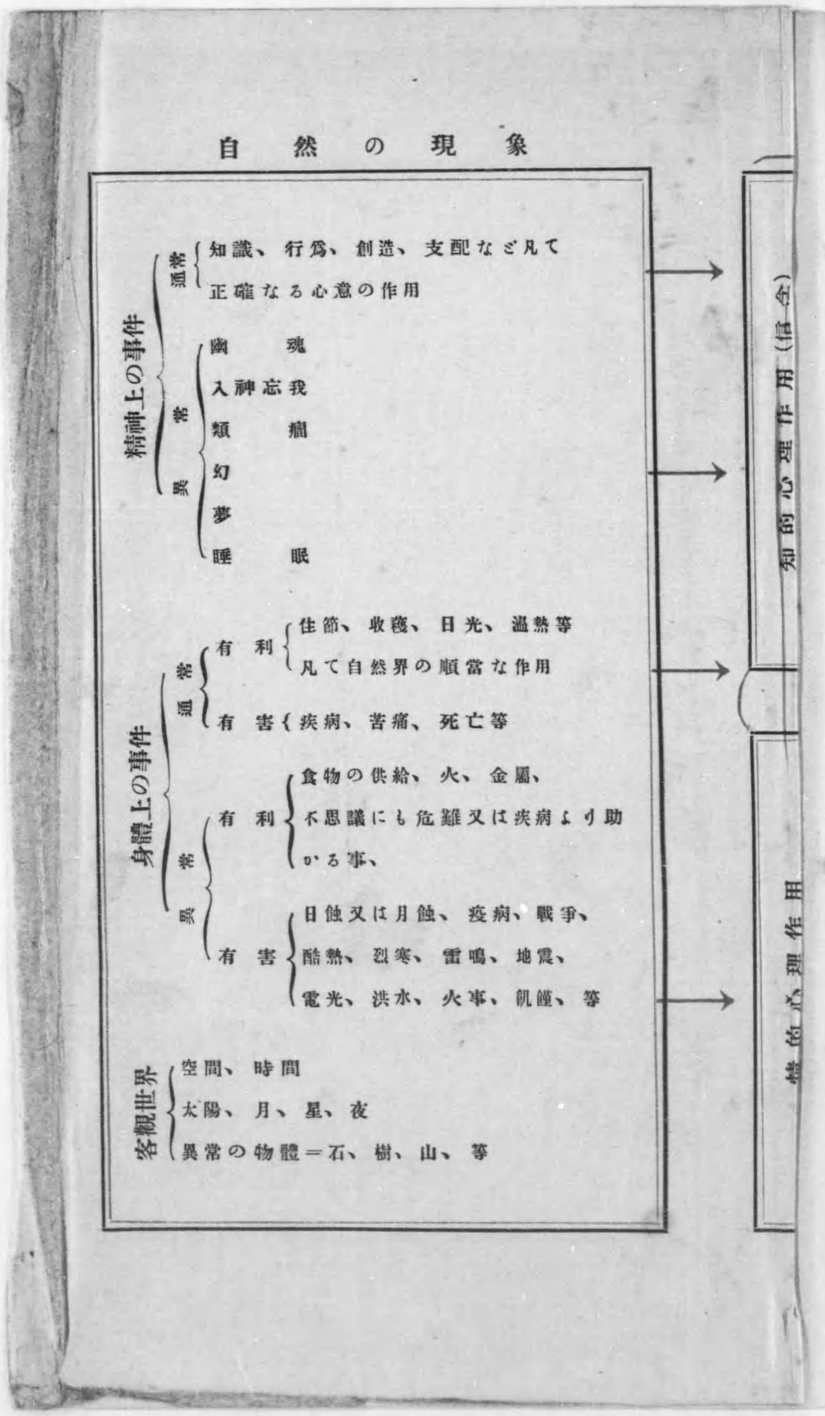
この大事業に對する吾人の本分

普汎的知識の必要

善き大部分は人間自身の活動の結果である事が分り、人間が幾千年間斷えず建立しつゝある文明の宮殿の宏大なる事美麗なる事複雜なる事が分かり、又この宮殿の建立のためには實に無數の人間が力を合せて働いて居る事が分かるであらう。斯のやうに大勢の働きに依つて漸々出來た所の文明の宮殿は、たゞ學者の專有すべきものでなくして、普通一般の人人も、又將來生れてくる人々も此處に住居し、其無量の富を享有して偕に樂しむべき筈である。苟くも第二十世紀の文明社會に棲息する者は、古今東西の人力を合せて從事しつゝある此の大事業を、大體了解すべき筈であらう、而して又此の大事業に就いて多少の貢獻をすべき筈であらうと思ふ。即ち私が本講演の最初に於いて言つたやうに、普汎的知識を得て自己生活を豐富にし進んで社會を利すべき筈であると思ふ。此知識を得て始めて、自己の爲すべき事業を明かに識り、自己の事業を改進するの道を悟り、又先人の遺した文明の富を我有とすると共に其富を保存し增殖して後代に讓ることが出來るのである。願くは、御互に知識世界の複雜渾沌たるを見て徒らに驚歎することなく、巧みに之を識別し之を分類し之を整理する良法を會得して、若々此世界を開拓し以て自他の智能を增進し幸福を增殖したいものである。

科學概論

終


自然の現象
精神上の事件
通常
知識、行爲、創造、支配など凡て
正確なる心意の作用
異常
幽魂
入神忘我
類癇
幻夢
睡眠
身體上の事件
通常
有利
住節、收穫、日光、溫熱等
凡て自然界の順當な作用
有害
疾病、苦痛、死亡等
異常
有利
食物の供給、火、金屬、
不思議にも危難又は疾病より助
かる事、
有害
日蝕又は月蝕、疫病、戰爭、
酷熱、烈寒、雷鳴、地震、
電光、洪水、火事、飢饉、等
客觀世界
空間、時間
太陽、月、星、夜
異常の物體＝石、樹、山、等
知的心理作用（信念）
情的心理作用

象

て凡ゞなど

光、溫熱等
當な作用
亡等
金屬、
又は疾病より助

疫病、戰爭、
嘯、地震、
事、飢饉、等

等

主觀的宗教

知的心理作用（信念）

進歩せるもの（審察的）

唯物的のもの
汎神論
唯心的のもの

種々の宇宙觀

二元論

有神論
超越神論
拜一神教

幼稚なるもの（直覺的）

多神教
精靈教

靈物
人間靈 { 死者 / 生者
善靈
惡靈

拜物教
寃術

情的心理作用

自然的のもの

養成せらるゝもの
- 宗教上の儀禮又は行爲に依て神と交通し
- 親密なる關係に入る感覺、
- 敬畏、尊崇、禮拜、讃美、
- 教訓及び信仰に基く感謝の念、
- 神々又は幽靈の復讐及び惡性惡行に關する
- 教訓又は信仰に基く恐怖、

樂しき事
- 感謝の念、平和、信托、信、望、愛、
- 驚奇、敬畏、崇拜心、尊崇、歡喜、

苦しき事
- 慰安和睦を得、神の歡心を買はんとするの願望、
- 扶助救濟の願望、
- 微小、薄弱、依賴、恐怖、畏敬、戰慄等の感覺、

意的心理作用

客觀的宗教

反省的のもの＝進歩せるもの

宗教的情感及び信念の意識的修養

- 神學的文學
- 宗教的文學
- 經書
- 教訓
- 教令書
- 教文集
- 僧會院
- 教會堂
- 祭祝
- 祭食
- 祭斷
- 感
- 神儀典
- 秘
- 禮
- 僧拜
- 聖尼
- 祭式
- 祭徒
- 預言
- 司
- 預言者
- 宗教的團體

幼稚なもの＝自然的のもの

- 治療者、犧牲、
- 供物、類癩、
- 入神、幻、
- 寃術、禮拜、
- 偶像、庶物崇拜、
- 祈禱、誓願、
- 神聖なる場處又は物體

＊ 矢の印は感化力の方向を示す、
＊ 此表は凡て下段より上段に進む順序を取る、

科學概論

終

主觀的宗教

自然の現象

- 常通
  - 知識、行爲、創造、支配など凡て正確なる心意の作用
- 異
  - 幽魂
  - 入神忘我
  - 幻覺
  - 夢
  - 睡眠

精神上の事件

- 常通
  - 有利
    - 凡て自然界の順當な作用
    - 佳節、收穫、日光、溫熱等
  - 有害
    - 疾病、苦痛、死亡等
- 異
  - 有利
    - 食物の供給、火、金圓、
    - 不思議にも危難又は疾病より助かる事、
  - 有害
    - 日蝕又は月蝕、疫病、戰爭、
    - 酷熱、烈寒、雷鳴、地震、
    - 電光、洪水、火事、飢饉、等

身體上の事件

客觀世界

- 空間、時間
- 太陽、月、星、夜
- 異常の物體＝石、樹、山、等

種々の宇宙觀

- 唯物的のもの
- 神
- 唯心的のもの

- 有神論
- 超越神論
- 拜一神教

進歩せるもの（省察的）

幼稚なるもの（直覺的）

- 多神教
- 精靈教
- 靈物
  - 人間
  - 善靈
  - 惡靈
- 拜物教
- 死者
- 生者
- 魔術

知的心理作用（信令）

- 成熟せるもの
  - 宗教上の儀禮又は行爲に依て神と交通し親密なる關係に入る感覺、
  - 敬畏、尊崇、禮拜、讃美、
  - 教訓及び信仰に基く感謝の念、
  - 神々又は幽靈の復讐及び惡性惡行に關する教訓又は信仰に基く恐怖、
- 自然的のもの
  - 樂しき事
    - 感謝の念、平和、信托、信、望、愛、
    - 驚奇、敬畏、崇拜心、尊崇、歡喜、
  - 苦しき事
    - 慰安和睦を得、神の歡心を買はんとするの願望、
    - 扶助救濟の願望、
    - 微小、薄弱、依頼、恐怖、畏敬、戰慄等の感覺、

情的心理作用

意的心理作用

* 矢の印は感化力の方向を示す、

* 此表は凡て下段より上段に進む順序を取る、

幼稚なもの＝自然的のもの　　成熟せるもの＝進化せるもの

SPONTANEOUS PHENOMENA

Psychical Occurrences

- **Regular**
  - All the regular processes of mind and Heart and Will, of Knowing and Doing, Creating and Ruling.
- **Extraordinary**
  - Apparitions
  - Ecstacy
  - Catalepsy
  - Trance
  - Dreams
  - Sleep

Physical Occurrences

- **Ordinary**
  - Helpful: All Nature's Regular Processes. Seasons, Crops, Sunlight, Warmth.
  - Harmful: Sickness, Pain, Death.
- **Extraordinary**
  - Helpful: Food supplies : fire : metals : Marvelous escapes from danger and disease.
  - Harmful: Eclipses : Pestilences : War : Heat : Cold : Thunder : Earthquake : Lightning : Floods : Fire : Famine :

Objective World

- Space and Time
- Sun, Moon, Stars, Night
- Extraordinary Objects : Stones, Trees, Mountains.

SUBJECTIVE RELIGION

Rational Psychosis (Beliefs)

- **Developed Reflective**
  - Materialistic
  - Pantheism
  - Idealistic
  - Spiritual
  - Dualism
  - Various World Views: Theism; Deism; Henotheism
- **Primitive Intuitive**
  - Polytheism
  - Spirits: Human (Dead, Living); Good; Evil
  - Animism : Fetichism : Magic

Emotional Psychosis

- **Cultivated**
  - Sense of communion and fellowship with Deity through religious rites, ceremonials, and conduct.
  - Awe : Reverence : Worship ; Praise :
  - Gratitude due to teachings and beliefs
  - fear produced through teachings and beliefs or to the revengeful power and evil dispositions of Gods and Spirits.
- **Spontaneous**
  - Pleasurable: Feelings of Gratitude : Peace : Trust : Faith : Hope : Love; Wonder, Awe, Worship, Revereuce : Joy
  - Painful: Desire to appease, propitiate, win; Desire for help-deliverance; Sense of Littleness : Weakness : Dependence; Fear : Dread ; Horror

Volitional Psychosis

OBJECTIVE RELIGION

Reflective : Developed

- **Conscious Cultivation of Religions Emotions and Beliefs**
  - Theological Literature
  - Religious Literature
  - Sacred Books
  - Instruction
  - Documents
  - Meetings
  - Monasteries
  - Churches : Temples
  - Festivals : Fasts
  - Mystic Feelings: Etc. Ecstasy Trance
  - Rites : Ceremonies : Worship
  - Monks : Nuns : Saints
  - Priests : Prophets
  - Religious Societies

Primitive : Spontaneous

- Medicine Men
- Sacrifices
- Offerings
- Catalepsy
- Ecstasy
- Trance
- Enchantments : Worship : Magic
- Idols : Fetiches : Prayers : Vows :
- Sacred Places and Objects

Arrows Show direction of Influence.
Read from left to right and from bottom upward.

ERSE. **Known and unknown.** **Knowable and unknowable.**

nalyzed and | Classified by ↓ Common Sense. ↓ ↓ ↓

etely Experienced, ↓ Analyzed and ↓ Classified by Critical Thought. ↓ ↓ ↓

SUBJECTIVE REFERENCE.

Interpretative Sciences.

Applied and Nermative Sciences.

Philosophy : More or less Complete Interpretations of Universe

Rational Interpretations and Metaphysics of the Departmental Sciences.

Theories as the Nature of the Ultimate Reality Metaphysics—Ontology.

Based Primarily on Rational and Secendarily on Religious Experience.

Supra-Personalism.
Personalism.
Voluntarism.
Intellectualism.
Solipsism.
Idealism (Spiritualism).
Monism.
Psychophysical Parallelism.
Dualism.
Pluralism.
Atomism.

[Agnosticism.]
[Positivism.]
Pragmatism.

Based Primarily on Religious and Secondarily on Rational Experience.

Panentheism.
Theism.
Pantheism.
Deism.
Monotheism.
Duotheism.
Polytheism.
Demonism.

Ovism.

Animism.

Hylozoism.

Naturalism
Mechnism.
Materialism.
Atomism.

Fetichism.

ilosophy of Religion.
" " Morals—Ethics.
" " Beauty—Æsthetics.
" " Mind—Psychology.

losophy of ociety (So- ology)
- Etc.
- Law.
- State.
- Education.
- Home.
- Ethnology.
- Anthropology.

chism
-Vitalism
lism.
mico-Physical Mechanism.

Anima.

Hyle.

aphysics of Matter and Force.
(Gravitation, Chemism, Electricity, etc.)
aphysical Forces.
(Molecyles, Atoms, Ions, Ether.)
aphysical Matter.

aphysics of Space and Metaphysics of Time.

Speculations and Interpretations as to Cosmological, Biological and Human. Origin, Evolution and History. Cosmogony, Biogeny Anthropogy.

Efficient Cause — Final Cause

Practical Application to Man's Purposive Life of the Principle disclosed by the Sciences and Philosophy of Man's Higher Life.

For Fulness of Personal Development.

Ideal Norms and Goals.

THEOLOGY.—God the Norm for Life as a Whole.
Fulness and Satisfaction of his Life of the Spirit.
(3) Man's right Relation to God as essential to the
(2) His Relations to the World and to Man, and
(1) The Character and Purpose of the Ultimate Reality (God): with special reference to
The Synthetic Science of the Universe as a Whole.
ETHICS. — Norms of the Good and their concrete application
ÆSTHETICS.—Norms of the Beautiful.
EPISTEMOLOGY.—Norms of the Real { Critical Idealism. Naive Idealism. Critical Realism. Naive Realism.
LOGIC. — Norms of the True.
MATHEMATICS.—Norms of Numerical and Space Relations.

For the Perfection of the Social Organism.

Social Norms and Goals.

SOCIOLOGY.—The True, the Beautiful and the Good.
Norms and Ideals of the laws of Social Well-being as grounded in the Science of Society as a Whole, especially expounding.
PEDAGOGICS.—Principles and Art of Teaching (Systematic Impartation of Social Heritage).
SCIENCE OF LAW.—General Principles of Justice, Right and Law.
INTERNATIONAL LAW.—Right and Duties of Nations.
POLITICS.—Principles and Art of Government: Theory of the State
CIVICS. —Rights and Duties of Citizens.
ECONOMICS. —The Science of Well-being as dependent on Wealth.

Living Beings.

For the Mastery and Utilization of Physical and Unimate Nature.

Practical Goals.

Etc.
Eugenics.
Medicine.
Breeding, Pisciculture.
Agriculture, Horticulture.

Inanimate Nature.

Etc.
Architecture.
Navigation.
Surocying, Engineering, Mining.
Applied Chemistry.

Applied Mathematics.

Ceaseless Struggle for Richness of Life and Realization of Ideals, Resulting in Human Evolution.

Psychological Reactions.

The Actual World as Modified and Modifiable by Man.

Objective Civilization

and Religion, Philosophy, Morality,
Art, Sciences, Society, Literature,
Developing Language,
revealed in constantly.
The Aggressive Life of the Spirit, and
Better Manhood and Womanhood

and Longevity, Physical and Mental Vigor of Life. Conquest of Disease, giving Health Quality of Food and Animals; Increased Variety and Improving Breeds of Domestic Plants

Travel and Transportation, General Intercommunication Clothiug and Housing
Utensils of all kinds; Machinery; Money
Progressive Mastery of Nature Physical Improvements.

Development of Civilization.

[Read from below upward.]

↑ Analyzed and ↑ Classified by Common | Sense.

ERSE. **[All columns are to be read from below upwards.]**

THE ACTUAL UNIVERSE. Known and unknown. Knowable an

Partially Experienced, ↓ Analyzed and | Classified by ↓ Common Sense. ↓

More Completely Experienced, ↓ Analyzed and ↓ Classified by Critical Thought. ↓

Common Sense.

OBJECTIVE REFERENCE.

SUBJECTIVE REFERENCE.

Descriptive Sciences.

Interpretative Sciences.

Human Phenomena.

Man as
- Religius.
- Moral.
- Æsthetic.
- Psychic
  - Etc.
  - Volitional.
  - Emotional.
  - Rational.
- Social
  - Etc.
  - Church.
  - State.
  - Industry.
  - School.
  - Home.

Perfetual Change.

Human Sciences.

Science of Religion.
Ethics.
Æsthetics.
- Sychology
  - Etc.
  - Descriptive Logic.
  - Experimental.
  - Comparative.
  - Empirical.
- Sociology
  - Etc.
  - Comparative.
  - Institutional.
  - Statistical.
  - Genetic.
  - Ethnological.
  - Anthropological.

Efforts at Mental Reconstruction of the Past: Only Probable Theories of

Human Evolution and History.

Philosophies of Human Phenomena.

Philosophy: More or less Complete Interpretations of Universe

Rational Interpretations and Metaphysics of the Departmental Sciences.

Philosophy of Religion.
- „ „ Morals—Ethics.
- „ „ Beauty—Æsthetics.
- „ „ Mind—Psychology.
- Philosophy of Society (Sociology)
  - Etc.
  - Law.
  - State.
  - Education.
  - Home.
  - Ethnology.
  - Anthropology.

Final Cause

Speculations and Interpretations as to
- Cosmological, Origin, Cosmogony, Biological and Human. Evolution and History. Biogeny Anthropogy.

Theories as the Nature of the Ultimate Reality Metaphysics—Ontology.

Based Primarily on Rational and Secendarily on Religious Experience.	Based Primarily on Religious and Secondarily on Rational Experience.
Supra-Personalism.	Panentheism.
Personalism.	Theism.
Voluntarism.	Pantheism.
Intellectualism.	Deism.
Solipsism.	Monotheism.
Idealism (Spiritualism).	Duotheism.
Monism.	Polytheism.
Psychophysical Parallelism.	Demonism.
Dualism.	
Pluralism.	
Atomism.	
[Agnosticism.]	
[Positivism.]	
Pragmatism.	

Man

Phenomena of Living Beings.

Animals.

Plants.

Movement.

Pure Biological Sciences.
- Etc.
- Physiology.
- Anatomy.
- Biology.
- Animal Psychology.
- Zoology
- Botany.

Biological Evolution.

Philosophies of Biological Phenomena.
- Psychism
- Neo-Vitalism — Anima.
- Vitalism.
- Chemico-Physical Mechanism.

Efficient Cause

- Ovism.
- Animism.

Phenomena of Inanimate World.

Sun, Moon, Stars, Earth

Things and Motions.

Time.

Pure Physical Sciences.
- Etc.
- Astronomy.
- Geology.
- Physics and Chemistry.

Cosmic and Terrestrial Evolution.

Philosophies of Physical Phenomena.
- Hyle.
- Metaphysics of Matter and Force. (Gravitation, Chemism, Electricity, etc.)
- Metaphysical Forces. (Molecyles, Atoms, Ions, Ether.)
- Metaphysical Matter.

- Hylozoism.
- Naturalism
- Mechnism.
- Materialism.
- Atomism.
- Fetichism.

Space.

Metaphysics of Space and Metaphysics of Time.

Practical Application to Man's Purposive Life of the Principle disclosed

Partially | Experienced, ↑ Analyzed and ↑ Classified by Common | Sense.

THE ACTUAL UNIVERSE. [All columns are to be read from belo

- Sciences 科學
  - Matter 質資
    - Inorganic 無機體的
      - Physics 物理學
      - Geology 地質學
      - Mineralogy 礦物學
      - Geography 地理學
      - Physiography 地文學
      - Chemistry 化學
      - Astronomy 天文學
    - Organic 有機體的
      - Biology 生物學
      - Botany 植物學
      - Zoology 動物學
      - Physiology 生理學
      - Anatomy 解剖學
      - Anthropology 人類學
      - Ethnology 人種學
      - Sociology 社會學
      - Economics 經濟學
  - The Spiritual Environment of the Pupil 學生の精神的境遇
    - Mind 心
      - Subjective- 主觀的
        - Psychology 心理學
      - Objective 客觀的
        - Logic 論理學
        - Metaphysics 形而上學
        - Aesthetics 美學
        - Ethics 倫理學
        - Language 語學
        - Mathematics 數學
    - Arts 技術
      - Architecture 建築術
      - Sculpture 彫刻術
      - Painting 畫學
      - Music 音樂
      - Literature 文學
      - Religion 宗教
    - Volitions 意志的行爲
      - History 歷史
      - Constitutions 制度
      - Law 法律
      - Morals 道德

- I Abstract Sciences 抽象的科學 (dealing with relations (物又は思想の that are manifested) 關係を研究す)
  - Qualitative 性質上のもの — Logic 論理學
  - Quantitative 分量上のもの — Mathematics 數學
- II Abstract-Concrete 抽象的具體的科學 Sciences. (dealing with (現はれたる properties that are 性質を manifested) 研究す)
  - in movement of masses 物體の運動に現はるゝ性質 — Molar Physics 一個體に關する物理
  - in movement of molecules and homogenious aggregates 分子の運動に現はるゝ性質及び同質分子の集合 — Molecular Physics 分子に關する物理
  - in movement of heteroge-neous molecular aggregates 異質分子の集合の運動に現はるゝ性質 — Chemistry 化學
- III Concrete Sciences 具體的科學 (dealing with aggrega- (物質の性質及び tes (with their proper- 關係を研究す) ties and relations) as 實際に關 actually exemplified) るもの
  - in Stella and planetary systems 恒星及び行星の組織 — Astronomy (Astrogeny) 星學又は星原學
  - in the Earth 地球 — Geology (Geogeny) 地質學又は地原學
  - in living organisms 生物 — Biology (Biogeny) 生物學又は生物起源論
  - in the functions which adjust organic actions to specific relations in the environment 生物が其境遇に適應する能力に關する研究 — Psychology (Psychogeny) 心理學又は心理起源論
  - in the mutual relations of living organisms grouped into Communities 公共團體を造る生物相互の關係に關する研究 — Sociology (Sociogeny) 社會學又は社會起源論

HUMAN LEARNING. (人間の學問)

- **Philosophia Prima, or Science** (第一哲學則ち知識)
- **Reason** (理性力) — **Philosophy, or the Sciences.** (哲學則ち諸科學)
  - **Natural Philosophy** (自然哲學)
    - **Man** (人)
      - Civil Philosophy (法政哲學) (Standards of Right in). (權利の標準)
        - Intercourse (個人的交際)
        - Business (實業)
        - Government (政治)
      - Philosophy of Humanity (人間哲學) (Anthropology). (人類學)
        - Body (身體)
          - Medicine Athletics, etc. (醫術 體育術等)
        - Soul (心靈)
          - Logic (論理學)
          - Ethics (倫理學)
    - **Nature** (自然)
      - Speculative (思索的)
        - Physics (物理學) (Material and Secondary Causes). (物質原因及び第二原因)
          - Concrete (具體)
          - Abstract (抽象)
        - Metaphysics (形而上學) (Formal Final Causes). (形式因及び目的因)
          - Concrete (具體)
          - Abstract (抽象)
      - Operative (活動的)
        - Mechanics (機械學)
        - Purified Magic (迷信を除去した魔術)
      - Mathematics (數學)
    - **God** (神)
      - Natural Theology (自然神學)
        - Nature of Angels, and Spirits (天使及び靈物の性質)
  - **Divinity** (神學)
    - Revelation (神の啓示)
- **Imagination** (想像力) — **Poesy** (作詩法)
  - Narrative, or Heroical (物語則ち勇士談)
  - Dramatic (劇)
  - Parabolic (Fables) 比喩 (作話)
- **Memory** (記憶力) — **History** (歴史)
  - **Civil** (政治)
    - Political (政治的)
      - Civil History proper (純粋の政治史)
        - Memorials (記憶上の材料)
        - Antiquities (古物上の材料)
        - Perfect History (成文的歴史)
    - Literary (文學)
      - Learning (學問に關する文學)
      - Arts (技術に關する文學)
    - Ecclesiastical (教會)
  - **Natural** (自然)
    - Bonds (自然界の制御) (Control by Man). (人間に支配せらるゝ事)
      - Arts (術)
        - Mechanical (機械的のもの)
        - Experimental (實驗的のもの)
    - Errors (自然界の錯誤) (Anomics). (法則外の畸形)
      - Pretergenerations (變則生成) (Monsters) (異形怪物)
    - Freedom (人間の支配を受けざる自由のもの) (Nomic Law) (法則的のもの)
      - Generations (萬物の生成)
        - Astronomical Physics (天體の物理)
        - Physical Geography (物理的地理學)
        - Physics of Matter (物體上に働く物理學)
        - Organic Species (生物の種類)

索引

ア

霊的原子論（アトミズム） 四一七、
物活説（アニミズム）（又は萬有靈活論） 四四、二三九、四一七、四二三、四二四、
アリストテレース 五五、六一、一〇一、一二六、一三七、二〇三、三二一、
アルフレッド、ケーブ 一七一以下、
アレキサンドリア哲學 五六、
アンドロニカス 一二六、

イ

一神論 四二五、
意志と心理性 二四三、
意志運動に關する諸問題 三三八、
一元的宇宙觀 四一九、

ウ

ウィリヤム、ホヰウェル 一五四、
宇宙に對する總合的科學 四六五、
宇宙の單一 四三四、
宇宙觀の種類 四一六、
宇宙の識られざる部分 三五九、
宇宙觀 三八、四二、三六一、

宇宙觀の必要　九八、
宇宙に對する常識的觀念　三六二、
宇宙に對する學術的觀念　三六三、
ヴィンデルバンド　一〇〇以下、
ヴント　一一九、
活力論（ヴィタリズム）　三九七以下、

エ

エピキュリアン派　一四一、
遠隔的進化に接近的進化　一一九、

オ

オイケン　二七五、

オッゲン　一四二、
應用科學　三六八、一二五、三七九、三八一、三八三、四六以下、
應用物理學　四三八、
應用生物學　四三八、
應用社會學　四三八、
應用數學　四四一、

カ

解釋的科學　三七八、三九二以下、四〇七以下、四三一、
客觀的活動の種類　四八六以下、
客觀的文明　四八六、四九〇、
客觀的觀念の五種　三六八、
客觀世界は心の所產　三七四、
客觀的宗教　二四四、二四五、
客觀的文明　三八三、
過去　三九〇、
過去現在未來の相關問題　四〇〇、
神といふ觀念　四七三、四七四、
神に對する愛人に對する愛　四九三、
カント　一一二、一二八、一三〇、二二二、
害惡の問題　四七二、

キ

記憶　四〇三、
機械的宇宙觀　二九七、
鬼神崇拜　四二三、四二四、

歸納法　六三、三七八、
規範的科學　四三七九、三八一、三八二、三八四、四三〇、四三以下、四四三以下、四五四以下、
規範の認識と尊重　四六一、
キリスト教　二〇四、
キリスト教の影響　三四四、
究極的問題　三九六、三九九、四〇〇、
近代思想　四四、

ク

ギリシヤ人　四四以下、二〇三、
ギリシヤ思想　四八、
ギリシヤ哲學者　一三〇、
クノー、フィシャー　一一二、

空間　三八四、三八九、三九三、
快樂說　三三七、
懷疑說　五〇、二〇五、三六五、
科學　三八、四七、二八五、
科學の目的　二八六、
科學の定義　八九、一二三、
科學主義　八〇、八三、二八五、
科學主義者の科學觀　一二一、
科學の意味　五七、三七七、
科學と哲學　六〇、六九、八四、一〇九、一一〇以下、一二〇、一二三、二四七、二九四、四三二、
科學の勃興　六五、
科學の用法　六七、
科學の特徵　七一、
科學の公準　七二、
科學の性質職分　八四、二八七以下、
科學と宗教　九五、二〇六、二六四、二九八、
科學の分類　一四一、一五七、
科學と哲學と宗教　一九二、
科學と哲學と宗教との衝突　二四七、二七五以下、
科學と哲學と宗教との調和　二五一、二八一以下、
科學と哲學と宗教との類似　三〇七以下、
科學と哲學と神學　二六二、
科學の範圍　二八六、三七七、
科學の數と內容　三九〇、
科學と哲學との權能　三〇二、
科學の種類　三七五、

科學と過去將來　三九〇、
科學者の解釋法　三七八、
グヨー　二一〇、
具體的科學　三九一、

ケ

經驗　八、
形而上學　一二六、三九六、四一三、
形而上學の原理と歷史　九五、
形而上學の必要　九六、
形而上學と實體論　一二五、一三四、二九二、
形而上學の定義　一三〇、
形而上學の意義　一三一、
形而上學と哲學　一三四、
形而上學と人間　四一四、
形而上學的宇宙觀の種類　四一五以下、四二三以下、
敎育の定義　一八一、
敎育の目的　一八二、
決定說　三三八以下
原因の定義　八六、
原因の種類　二九八、
言語　三、二二、二九、
現實の宇宙　三五八、
現象論　七九、
現象の觀察　三九九、

コ

幸福觀　二八、
高等科學　六九、
心と身體との關係　四〇三、
心と腦髓との關係　四〇三、
心の統一　四〇三、
行爲上の規範　四五二、
コルレッヂ　一五〇、
コント　七六、一五六、
功利的倫理說　三三五、
合理的の形而上學的宇宙觀　四一五、四一六、

サ

サバチエー　二二、

シ

宗教　一九二以下、二九八以下、
宗教の定義　二〇八、
宗教の性質　一九四、二一九、
宗教の位置　一八九、二三二、
宗教の勢力　一九五、
宗教の動機　二九九、
宗教の類別　二三二、二三四、
宗教の起因　二二〇、二二六以下、二九九、
宗教の要素　二一八、四八四、
宗教の內容　二二五、
宗教觀　二〇二、二〇七、二一四、
宗教哲學　一九九、四七八、
宗教心理學　一九九、二〇九、
宗教の心理的作用　二二四、二三三以下、二九九、
宗教の新觀念　二二六九、
宗教的現象　二二四、四〇二、
宗教のシンタグマ　二七五、
宗教高能主義（レリヂヨニズム）　二七七、
宗教歷史　一九九、
宗教の科學的研究　一九八、二〇一、
宗教の哲學的研究　一九八、
宗教に對する態度　一九六、二〇三、二〇五、
宗教の必要　三〇一、三〇三、三五四、
宗教の特質　三〇四、四六六、
宗教の確信　三〇四、
宗教と智情意　二四四、
宗教の永續　二四七、二五四、二五五、
宗教と迷信　二四八、
宗教の發達　二四八、四六七、
宗教と知的分子　二六二、
宗教科學　四七七、
宗教と道德　四九六、
ソエリング　一一五、
思索的哲學　一一五、

自然萬能主義　二八〇、
自然界の事物　三三七、
自然界　三九、
自然科學　六〇、六八、三七七、
自然界の法則　二八五、
自然哲學者　三九四、
シセロ　二〇八、三三六、
思想界の範圍　二、
思想發達史　六五、七七、
社會的現象　四〇〇、
主觀と客觀　四八五、
主觀的宗教　二四五、
主知的宇宙觀　四二〇、
主意的宇宙觀　四二〇、
諸論の可否判斷に就て　四二七、
シュライルマヘル　二一〇、
諸科學の關係　三五八、
將來　三九〇、
シンダマ　二七五、
新プラトーン派　一〇三、
眞正の宗教　四九三、四九五、
新活力論　三九八、
新宗教觀　四九三、四九七、
心意界　四〇、
神話　四三、
神學と哲學　二七一、

神學の必要　二七〇、
神學の諸問題　二六八以下、
神學と宗教及科學との關係　二六六、四六五、
神學の定義　二七三、四七七、
神學の意義　二五九、四七六、
神學と宗教との關係　二五八、
神學の目的　二六三、
神學と時代思想　二六四、
進化的倫理說　三三六、
進步の二階段　二四五、
進步的組織神學　四六九以下、
時間　三八七、三八八、三八九、四〇五、四一一、
自我實現說　三三七、
ジャストロー　二一三、
自由說　三三八、
ジョン、スチュアート、ミル　一六四、
ジョン、ロック　一四九、
敍述的科學　三七五、三七八、三八四以下、四三一、
情性中心論　二一〇、
自律說　三四一、
人類の進步　四九二、
人類宗教　七九、
人類學　三八六、
人格的宇宙觀　四二一、
人性重要觀　四〇二、
人體進化　四一〇、

人類發展史　四八九、

ス

推理的科學　六九、
數學　三八五、四四六、
スコラ哲學　六二、一四二、二〇五、
ストイック派　一四〇、
スペンサー　一三六、一六一以下、二一〇、

セ

生活法に關する實驗　四九一、
生物界　三九、三八五、
生物界現象　三九七、四〇八、
西洋倫理學史　三四三以下、
政治に關する實驗　四九〇、
精神物理並行論　四一八、
積極的科學　四七八、
先行狀態　八七、
善惡の別　三三三、
（『倫理學』を見よ）
善の性質及起源　四六〇、
全人格論　二二三、
（『宗教心理』を見よ）
全體的の解釋的科學　四一三、
全宇宙に關する觀念　四〇四、

ソ

組織神學　四六五、四七二以下、四七七、
ソクラテース　五二、五四、一三七、三二〇、三四三、
ソクラテースの弟子　三四四、
ソフィスト　五〇、
相對論　五〇、

タ

多元的宇宙觀　四一七、
他律說　三四一、
タブリュー、スミス　二〇二、
ダマスコのジョン　一四二、
ダンス、スコタス　六二、
ダーリング　一一二、
ダーウィン　一一九、
男女の關係　四九〇、

チ

抽象概念　五三、
抽象的科學　三九一、
知識の追求　三八〇、
知識　一以下、六八、
知識の分類　一三七、一五七、一六五、一八四以下、
知識の範圍　一八八以下、
智情意は一也　二四一、

智性中心論者　二一〇、
（宗教心理を見よ）
チャールス、シールズ　一六五以下、
直覺的倫理說　三三四、
超越的倫理說　三三五、
直覺の價値判斷　四五五、
直覺的規範　四六三、
重力　九三、
常識的概念　八、
純粹科學　六八、一二五、
實業科學　六九、
實證論　七六、四二二、
實體論　一二七、一三〇、
實用主義　四二二、
チーラ　二二一、

テ

ティラー　二〇三、
超人格的宇宙觀　四二一、
超越神論　四二五、
哲學と直覺　二九五、
哲學の種類　二九三、二九五、
哲學者の科學觀　一二一、
哲學の地位　一一九、
哲學の必要　一一八、二九〇、
哲學の性質職分　一〇八、一二〇、二九一、二九三、

哲學の意義目的　一〇七、一二五、
哲學　四七、二九一以下、
哲學の定義　九一、一〇〇、一〇一、一一〇、一三五以下、二一
哲學と哲學史　一〇一、
哲學の徑路　一〇四、一一五、
哲學と宗教又は神學　一〇六、一〇四、一九二、一九二、二
デカルト　一四八、

ト

突然變化　一七、
トーイ　二〇二、
道德　三二六、
道德の術語　三二六、
道德的生活　三二七以下、
道德性　三二九、
道德と情意　三五五、三五七、
道德及倫理學の位置　三五七、
道德的現象　四〇二、
道德行爲の目的及動機　三三七、
道德的責任の起源　三四一、
道德と宗教及哲學との關係　三四六、
同一哲學　四一九、

ニ

二元的宇宙觀　四一八、
二神教（ゾロアスタ教）　四二四

ニュートン　九二、
人間の心理的事件　二三一、
（『宗教起因』を見よ）
人間の知識　三四、
人間の起源と發達　一六、
人間の進歩　一九以下、
人間の生活　三四六、
人間の要求　一四、
人間活動の目的　三五六、
人間の行爲　三五六、
人間の特別性　三六九、
人間と宗教　二五〇、
人間の理想　三八一、
人間界の現象　三八六、四〇〇、
人間の心理的現象　四〇一、
人間と形而上學的觀念　四六六、
人間界の刺戟　四八八、
人間の建てたる文明の宮殿　五〇〇、
認識論　四四七以下、

ノ

ノバリス　一三六、

ハ

「ハイレ」といふ思想　三九九、
如何に乎　二八三、

拜物教　二三九、四二三、
ハミルトン　一三六、
ハンボルト　一一九、
バウンガーデン　三二一、
バルフォーア　一三六、
バウルゼン　一一〇以下、一三〇以下、
萬物在神論　四二六、

ヒ

批評的思想　三六六以下、
品性の進退　四六〇、
品性の優劣　四六〇、
品性の教育　四六一、
美の念　三一八、三一九、三二三、
美念の對象　三一八、
美學の起源發達　三二〇、
美學上の問題　三二二、三二三、四四九、
美學の分類　三二二、四四九、
美學の位置　三二四、
美的現象　四〇二、
ピアソン　一四六、一七四以下、
ピタゴラス　五四、

フ

フィスク　一六二、
フィジオロヂスト　五〇、

フィヒテ　一一五、二二二、
不可識論　七九、
不可知論　四二、
フシス　四九、五三、
普汎的知識の必要　一、三二、五〇〇、
普汎的知識の困難　二、
普汎的知識を得る途　八、三一、
フライデレル　二一一、
フランシス、ベーコン　六二、一四五以下、
フレーザー　二一一、
物理的活力論　三九八、
物理的宇宙觀　九四、
部分的規範科學　四四六以下、
物質及勢力　三九〇、三九四、
物質界の現象　三九六、
物件所有に關する實驗　四九二、
プルタック　一三五、
プラトーン　三五、二二、一〇一、一二七、一三七、二〇三、
プラグマチズム　九九、
プロチノス　三二一、
ヘルデル　二〇一、
ヘーゲル　四七、一〇九、一一五、一五二、二〇二、
ベーコン　六五、

ホ

ホッブス　一三六、一四九、
何故乎（ホッツイト）　二八三、
何乎（ホッツト）　二八三、
法則の定義　八八、
ホーン　一八一以下、
ボールドウィン　一三二、
汎神論　四三六、
想定（ガッチェレート）又は公準　七二以下、

マ

マイヤー　七三、
マクスミュラー　二〇二、

ム

無生物界の現象　三八五、三九二、四〇六、
無神論的解釋　四〇八、

モ

目的的宇宙觀　二九七、
目的原因の必要　四〇三、

ヤ

野蠻と文明　八、

ユ

唯物論(又は自然論)　三六六、四〇七

唯物的宇宙觀　四二九、

唯心的宇宙觀　四二九、

唯我的宇宙觀　四二〇、

有神論　四二六、四七八、

有神論的解釋　四〇八、

ユーバーヘック　二二三、

予の科學配列法　三八六、

ラ

ライプニッツ　二三六、

ラクタンシヤス　二〇八、

リ

リッチル　二二一、

リップス　二二三、

理性の性質　二二九、二四一、二四三、

理性高能主義　二七八、

リール　二三六、

倫理說の種類　三三四、

倫理學上の問題　三三四、

倫理學上の根本觀念　三三三、

倫理學と哲學及宗教學との關係　三三三、

倫理學の性質　三三二、三四八、

倫理學　三三一、四五一、四七九、

倫理的自制　二七、

倫理學の位置　三四二、

レ

靈界　四〇、

靈界發見　二五、

歴史的神學　四七八、

レッシング　二〇二、

レナン　二〇二、

レビール　二〇二、

「レリヂヨン」の意味　二〇八、

ロ

ロイド、モルガン　八一、

ロイバー　二二三、

勞働者に關する實驗　四九一、

論理學　四四六、

ワ

ヴルフ　二二七、二四九、

不許複製

大正三年一月二十九日印刷
大正三年二月一日發行

著作者　シドニイ・ギュリック

發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
福永文之助

印刷者　横濱市太田町五丁目八十七番地
村岡平吉

印刷所　横濱市山下町百〇四番地
福音印刷合資會社

發行所　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
聲醒社書店
振替東京五五三（電話新一五八七）

定價壹圓六拾錢

シドニイ ギユリック先生著

獨逸神學略史

■寫眞・肖像數枚
■定價一圓廿五錢
■郵稅八　錢

ギユリック先生の神學に於ける造詣の淺からざるは、人々のすでに知る處。本書は其蘊蓄を傾け盡して、講述せられたるものにして、我神學界無二の權威なること瞭か也。されば斯學研究者のためにすゝむ。

■舊約聖書の話（第二）　定價四十錢　郵稅四錢

■舊新約聖書對讀文　定價四十錢　郵稅四錢

波多野精一先生著
■スピノザ研究　定價七十錢　郵稅八錢

フラトーン教授原著　元田作之進先生譯
■哲學通論　定價一圓卅錢　郵稅十二錢

ベルグソン教授原著　錦田義富先生譯
■ベルグソンの哲學　定價七十錢　郵稅八錢

メエビウス教授原著　三浦白水先生譯
■ニィチェの人格及哲學　定價六十錢　郵稅六錢

オイケン教授原著　加藤直士先生譯
■現代宗教哲學の主要問題　定價一圓　郵稅八錢

近刊豫告

近代思想と宗教　■上村邦良氏著

基督教の根本問題　■富永德磨氏著

青年期の心理及教育　■和田琳熊氏譯

基督教大意　■田村直臣氏著

29

349
229

終